

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
(博士後期課程) 地域政策科学専攻

プロジェクト研究報告集

2016.3 No.13

差異から
「世界」を見る



鹿児島大学大学院
人文社会科学研究科 地域政策科学専攻

統一テーマを基点に研究の進展を期待して

丹羽謙治
(プロジェクト研究担当)

地域政策科学専攻の必修科目である「プロジェクト研究」は、専攻設置以来独自のプログラムとして学生による共同研究（あるいは統一テーマのもとでの個人研究）を行ってきた。今年度で13回を数える。『プロジェクト研究報告集』のバックナンバーをめくると、参加者が研究者としての企画・調査・実践力を育てていった軌跡が明らかになるとともに、博士論文の執筆に生かされていったさまがよく理解できる。

今回は、4名の学生（1年3名、2年1名）が報告者となり、統一テーマの設定から、個々の研究テーマの設定、調査・成果の報告、報告会での報告を行った。報告者以外の学生は、模擬発表、報告者の発表に対するコメント、ポスター等の製作といった側面から研究を支えた。授業は昨年同様、総合研究棟のLL教室においてテレビ会議システムやスカイプを利用し、菴美サテライト教室や学生の自宅を結んで行う形となった。また、指導は丹羽のほか、市川英孝准教授、桑原季雄教授、福ヶ迫加那特任助教の4名で当たった。

今年度の「プロジェクト研究」は、昨年度にまして苦労が多かったように思う。本来、研究テーマの違いはもとより、国籍も年齢も、また育ってきた環境や興味関心もさまざまな人間が一堂に会し、共同して研究を行うことはかなり困難を伴うものである。一つには学生の多様性、二つにはプロジェクト研究の意義がなかなか見えてこないという学生のつぶやきが聞こえてきたように、学生の共通理解が得にくかったということもあった。こうしたことは、統一テーマの選定段階から発していた。発表会をなんとか終えた段階では、教員の力不足など反省点も多いが、入り口のところで意味がわからないと語っていた学生も、発表を終

えた今は、その意味が一研究を行うのはどういうことか、あるいは研究発表とはどうあるべきなのかーが理解できたのではないか。また、日本と外国の研究スタイルの違いに気づかされた学生もいたようだ。

今回の統一テーマは「差異から『世界』を見る」。「格差」といったことが連日報道されているし、「差」を扱ったテレビ番組も目にする。「差異」は現代のキーワードのひとつでもある。研究の方面から考えれば、われわれはさまざまな現象の「差異」に着目したり取り上げたりしながら論文を書く。当たり前のことではあるが、それを意識してそれぞれの専門分野に引き付けてテーマを設定してみるとどうなるかというのが今回の課題であった。

博士論文の一部になっていく報告もあれば、そうでないものもあるかもしれない。テーマ設定や進め方に反省点も多くあったであろう。しかし、プロジェクト研究は自分で決めたことを大いに考えて実践してみることが肝心であり、その結果を受け入れ、未来の成果に繋げていくことが重要である。今後の学生の頑張りに期待したい。

最後に、報告会で貴重なコメントをいただいた財部めぐみ、星野元興両氏に感謝申し上げる。

にわ けんじ
丹羽 謙治

鹿児島大学法文学部人文学科教授、大学院人文社会科学研究所地域政策科学専攻「地域言語文化史」担当。

目 次

巻頭文

統一テーマを基点に研究の進展を期待して

丹羽謙治

報告

原作（書籍）と映画

—鹿児島大学生の物語世界へのアプローチ—

濱田みゆき

1

天正・慶長使節のスペイン訪問

—その表象のあり方と影響—

ホルヘ・ガルシア・アロヨ

13

島嶼におけるエコツーリズムの特徴と在り方

—その成立過程に着目して—

宋 多情

23

戦後日本の地方政治における理念と内実

—奄美における保徳戦争を事例に—

寿 洋一郎

31

コメント

「プロジェクト研究発表に寄せて」

財部めぐみ

39

「プロジェクト研究報告会の感想と講評」

星野元興

41

プロジェクト研究を振り返って

43

原作（書籍）と映画

—鹿児島大学生の物語世界へのアプローチ—

人文社会学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース1年

濱田 みゆき

はじめに

本研究は、若者の物語享受の実態的な把握の一環として、大学生の原作（書籍）および映画へのアプローチ、アクセスに差異は認められるのか、そしてそれぞれ享受した後の行動に差異はあるのかをアンケート調査に基づき明らかにしようとするものである。

私たちは生まれた直後には言葉や文字を持たないが、コミュニケーション手段の重要なツールとして言葉と文字を獲得して生きていく。発達に応じ読書対象は、絵を中心とした絵本から文字中心の一般的な書籍へと移行していく。本は言葉や文字獲得のために重要な位置を占めていると言えよう。

一方、私たちはこの文字文化圏の中に生活しながらも、幼いころより漫画やアニメ、ゲームに親しみ、伝達媒体としてもテレビ、パソコン、各種モバイルなど多種多様なものに触れられる環境にある。

言葉は概念の形成、意思伝達、創造という重要な機能によって人の文化的な生活を支えていると言えるだろう。言葉によって書かれている物語は人とのコミュニケーションを助けるものに適している。コミュニケーションとは相手のことを慮ることであり、推測・想像することとも言える。そしてそれは創造する力ともなるであろう。また、映像、音声で表現する映画も人間の五感に強く訴え、印象深く物語を伝えるのに適している。書籍や映画により、物語を読むこと、観ること、聴くことは重要であろう。

各種読書調査や研究、あるいは読書や映画についての研究は数多くみられるが、読書と映画の視聴行動の比較に関しては、利用者に映画と原作のどちらを先に

みるか等のインタビュー記事が図書館ホームページ等に掲載されている程度で、数値を見ることができるアンケート調査は見当たらなかった。

そこで、今回新たに調査票を作成し、鹿児島県という地域にある総合大学に在籍する学生へアンケート調査を行った。回答者は18歳から20代までの学生である¹。これは、現在の若者の書籍や映画へのアプローチの現状の一端を知るための調査である。アンケートにより得られたデータに基づき、学生の活字（原作）と映画への行動・意識を分析し考察する。

1. 原作（書籍）と映画

書籍と映画は、多種多様なメディア環境の中にある今日においても、物語を受容するものとして最もポピュラーなもののひとつと言えるであろう。今も活字原作をもとに映画化された作品が、続々と封切られている。活字離れがもはや当たり前のように言われる現在においては、映画は原作の代替となり、映画を観ればもはや原作は読まれることはないのであろうか。あるいは、映画を観ることによって、原作にも関心が及ぶのであろうか。

今回書籍と映画を対象として調査するにあたり、まず、物語の定義を確認しておきたい。『広辞苑』²によると、「作者の見聞または想像を基礎とし、人物・事件について叙述した散文の文学作品。狭義には平安時代から室町時代までのものをいう。（後略）」とある。換言すれば、私たちの生活や思想などの全体や断片を

1 今回のアンケート回答者には30歳以上の学生がいなかった。

2 新村出編『広辞苑』第6版（岩波書店、2008年）

現実的にあるいは空想的に描いたものと考えてよいだろう。

毎日新聞社が毎年「読書世論調査」を行っている³。そこで、「一日にどのくらいの時間、書籍（単行本、文庫・新書本）を読んでいるか、テレビ、ビデオ・DVD、インターネットに接しているか」のメディア接触時間が調査されている。満16歳以上の人のメディア接触時間は、書籍が30分、テレビは183分、ビデオ・DVDは37分、インターネットが66分である。この数字だけを見れば、書籍への接触時間は映画を観ることのできる他メディアに比較して短いと言える。

今回のアンケートでは、原作は活字のみに限定し、絵本やアニメは含まないが、書籍であれば、紙でも電子でも可とし、映画は視聴方法や内容にも制限を設けていない。

2. 調査方法

(1) 対象者

- ・鹿児島大学工学部学生 1クラス（英語コア受講生）27名
- ・鹿児島大学法文学部学生 2クラス（映像制作演習受講生）25名、（アメリカ文学受講生）45名

(2) 調査期間

- ・平成27年12月14日（月）英語コア、映像制作演習
- ・平成27年12月24日（木）アメリカ文学

(3) 調査方法

授業中に配布、回収

(4) 調査票

調査票は下記の点を中心にして項目を設定した。

- ・原作と映画はどちらが好まれているか
- ・学生は原作（書籍）及び映画をみているのか
- ・学生は原作と映画の関連を意識しているのか、またそれらは相互に影響しているか
- ・原作と映画は再読・再視聴されているか

3. 結果と分析

鹿児島大学は、9学部を擁し、学部生総数が9,008名、内女性3,557名の総合大学である（平成26年5月1日現在）⁴。今回の調査は法文学部と工学部の97名を対象とした。100名に若干足りず、また男女の割合も男性が37名、女性が59名（不明1名）と逆転しているため、鹿児島大学としての傾向を示すことは難しいかもしれないが、学生の動向を見ることはできるのではないかと思う。

最初に書籍と映画への興味・関心を聞いた。書籍を読む時間が少ないと言われ、また映画も漫画、ゲームなど様々や娯楽があるなか、はたして好まれているのであろうか。学生の書籍や映画への関心は実際にはどのようなのであろうか。

「原作（書籍）」と「映画」への興味・関心を聞いた結果が図1のグラフである。「両方とも好き」な学生が46%（45名）と最も多く、次いで「映画」が35%（34名）、「書籍」が17%（16名）、「両方とも嫌い」は1%（1名）であった。2倍以上の学生が映画の方が書籍より好きであったが、両方共好きな学生が一番多く46%（45名）いた。

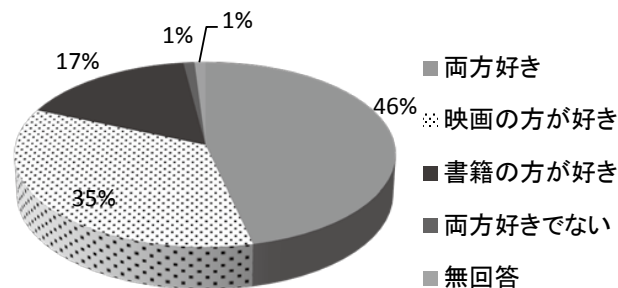


図1 原作（書籍）と映画への興味・関心

仮説1 映画と原作では、映画の方を原作より早く観る

原作と映画では、通常原作の方が早く出版されているので、原作の方を早く読んでいると推測したくなる。

3 『読書世論調査 2015 年版』（毎日新聞社、2015 年）

4 鹿児島大学ホームページ

しかしながら、映画を先に観たことにより、原作に興味を持ち、読んだということも実際に耳にする。また、映画は一度の視聴で視聴者に分かるように制作されており、理解しやすいと考えられる。さらに、映像や音声という魅力もあるので映画から観ることの方が多いのではないだろうか。そこで、「映画と原作では、映画の方を原作より早く観る」という仮説を立てた。

「原作と映画を両方みる場合どちらを先にみる人が多いですか」と尋ね、その結果を図示(図2)した。「映画」32人、「原作」31人、「決まっていない」31人とほぼ同じ割合であり、映画の方を早く観るという仮説とは異なる結果であった。どちらとも決まっていないグループも加えるならば、現在の鹿児島大学の学生は映画を先に観ているとは一概には言えず、原作を読んで自分で読み解いた後に映画を観ている人たちも相当数いることが分かった。

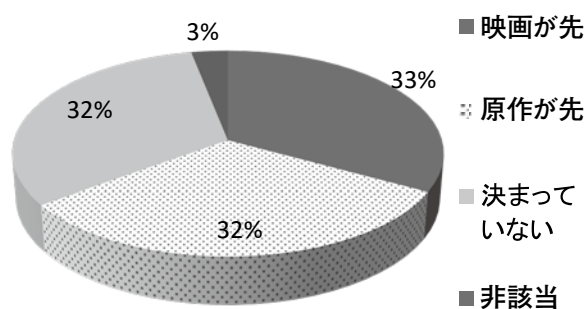


図2 映画・原作へのアプローチ順

では、映画や原作を先にみる行動は何によるものであるか、それぞれに先にみる理由を聞いた。「映画を先に観る」32人の中では、「映画の方が原作より理解しやすいから」と答えた割合が一番多かったが、「原作を知らずに映画からみた」人の割合も多かった(図3)。

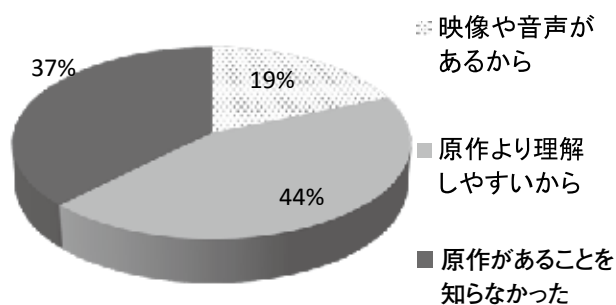


図3 映画を先に観る理由

「原作から読んだ人」の中では、「原作が先に出版されていたから」という理由がやはり最も多かった。「自分でイメージしたい」「解釈したい」という人たちを合わせると45%に上った。図4に示している。

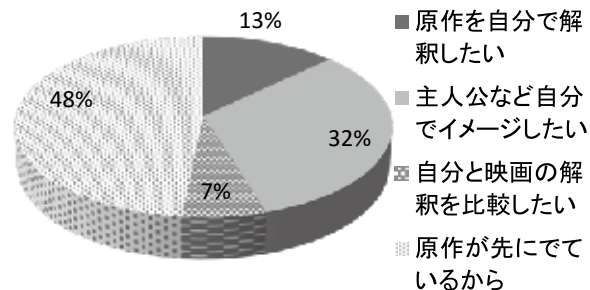


図4 書籍を先に読む理由

仮説2 映画を観た人は、原作も読む

映画を観た後、書籍(原作)を読みたくなるかを聞いた。原作と映画への興味・関心とのクロス結果が表1と図5である。「両方とも好き」「映画が好き」「書籍が好き」のいずれのグループも映画を観ることにより、原作への興味を喚起している。映画鑑賞後、原作を読みたくなる割合が最も高かったのは「書籍が好き」な学生のグループであった。「書籍が好き」なグループが原作も読みたくなるのは当然の結果かもしれない。逆に「映画を観たら原作は読まない」は、「両方好き」と答えた学生のグループが最も少ない割合であった。これも両方のメディアを好きな学生の回答として肯けるものである。

逆のパターンも聞いた。原作を読んだ後、映画を観たくなるかである。これについても興味・関心とのクロス集計を行った。表2と図6である。原作を読むことも映画への興味をもたらししていた。また、こちらのパターンの方は原作を読んだ後、「映画を観なくなる」、「映画は観ない」、「関連を気にしない」の割合が「両方好き」、「映画」、「書籍」のグループで似たような割合であった。

仮説では、「映画鑑賞後は原作を読む」としたが、「原作を読んだ後、映画を観る」も、それぞれ58人と57人でほぼ同数であった。この数字だけをみると、仮説の予想とは異なり、映画、原作は同様に興味を喚起

し合う関係だと言えよう。

原作も映画も両方見たことがある人へのみ、どうして両方ともみたかを6つの選択肢から選んでもらっ

た。選択は複数可とした。それをグラフにしたのが、図7である。映画での映像・音声表現、原作での表現を知りたい人たちが多い割合の結果となった。

表1 興味・関心と映画鑑賞後の関連

興味・関心		映画鑑賞後			合計
		原作を読みたくなる	原作は読まない	関連は気にしない	
両方好き	度数	28	5	12	45
	興味・関心の%	62.2%	11.1%	26.7%	100.0%
	映画鑑賞後の%	48.3%	27.8%	57.1%	46.4%
映画が好き	度数	17	9	8	34
	興味・関心の%	50.0%	26.5%	23.5%	100.0%
	映画鑑賞後の%	29.3%	50.0%	38.1%	35.1%
書籍が好き	度数	12	4	0	16
	興味・関心の%	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%
	映画鑑賞後の%	20.7%	22.2%	0.0%	16.5%
両方とも好きでない	度数	0	0	1	1
	興味・関心の%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
	映画鑑賞後の%	0.0%	0.0%	4.8%	1.0%
無回答	度数	1	0	0	1
	興味・関心の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	映画鑑賞後の%	1.7%	0.0%	0.0%	1.0%
合計	度数	58	18	21	97
	興味・関心の%	59.8%	18.6%	21.6%	100.0%
	映画鑑賞後の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表2 興味・関心と書籍読後の関連

興味・関心		書籍読後					合計
		映画も観たくなる	映画は観ない	関連は気にしない	原作を読んだことがない	無回答	
両方好き	度数	26	8	10	0	1	45
	興味・関心の%	57.8%	17.8%	22.2%	0.0%	2.2%	100.0%
	書籍読後の%	45.6%	57.1%	43.5%	0.0%	100.0%	46.4%
映画が好き	度数	19	4	9	2	0	34
	興味・関心の%	55.9%	11.8%	26.5%	5.9%	0.0%	100.0%
	書籍読後の%	33.3%	28.6%	39.1%	100.0%	0.0%	35.1%
書籍が好き	度数	10	2	4	0	0	16
	興味・関心の%	62.5%	12.5%	25.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	書籍読後の%	17.5%	14.3%	17.4%	0.0%	0.0%	16.5%
両方とも好きでない	度数	1	0	0	0	0	1
	興味・関心の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	書籍読後の%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%
無回答	度数	1	0	0	0	0	1
	興味・関心の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	書籍読後の%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%
合計	度数	57	14	23	2	1	97
	興味・関心の%	58.8%	14.4%	23.7%	2.1%	1.0%	100.0%
	書籍読後の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

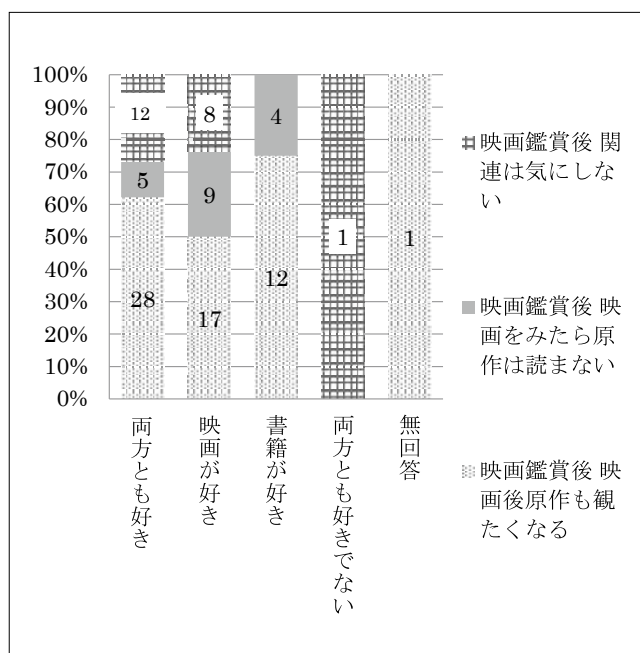


図5 興味・関心と映画鑑賞後の関連

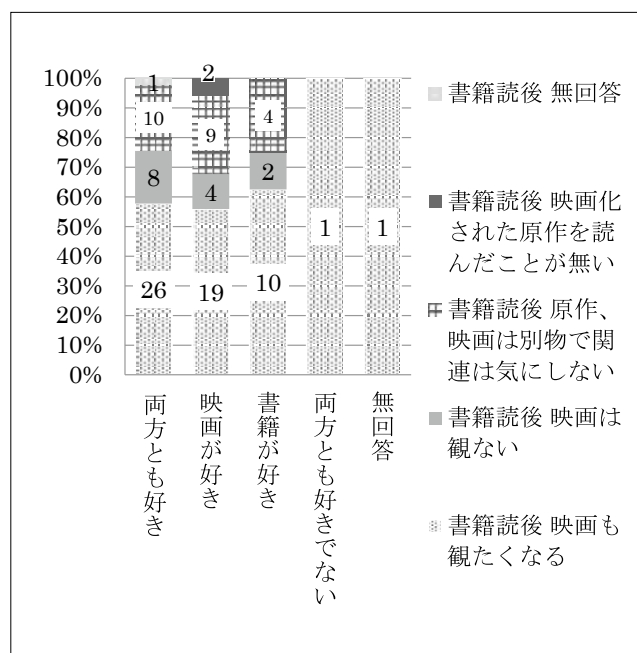


図6 興味・関心と書籍読後の関連

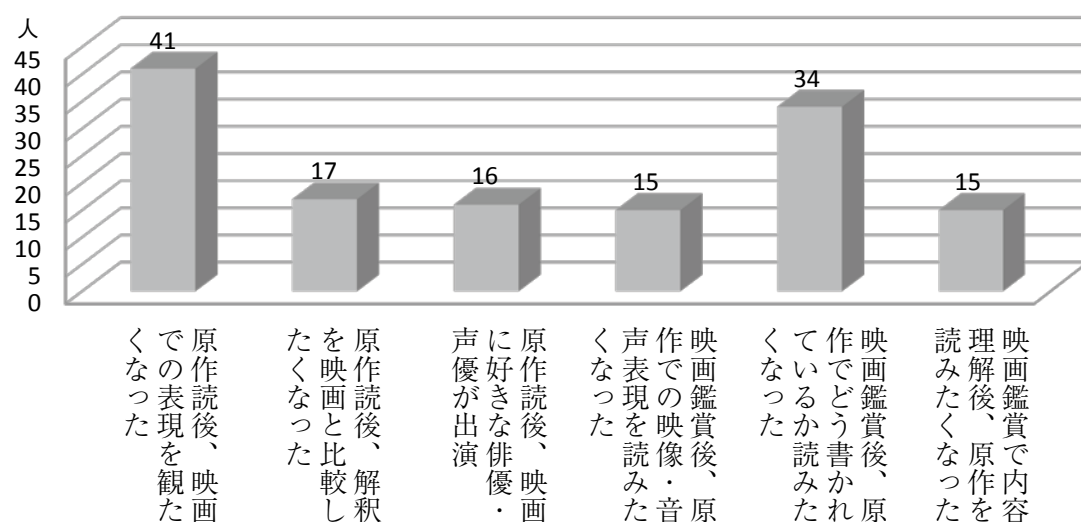


図7 原作も映画もみた理由

仮説3 映画と原作では、映画を2回以上観る人が多い

映画と原作では、映画の方が強い印象を与えると考えられるため、「映画を2回以上観る人が多い」との仮説を立て映画と原作の両方をみたことのある人のみに、「再度見直したことがあるか」を尋ねた。「映画のみ」を再度観たことがある人が24人で一番多かった。図8に示してある。「両方とも再度みた」ことがある人も22人と多かったが、映画と原作との比較で言えば、

映画の方が再度観る人が多かった。

再度みた理由についても尋ねた。各選択肢でそれぞれあてはまるかどうかを尋ねた。図9に示している。「映画は映像や音声があるので、また観たくなる」と回答した人が39名と最も多かった。やはり映像や音声の力には人を引き付ける強いものがあるようである。映画を再視聴した理由がグラフの左側であるが、全体的に左側の方が数字が多いのを見てとれる。

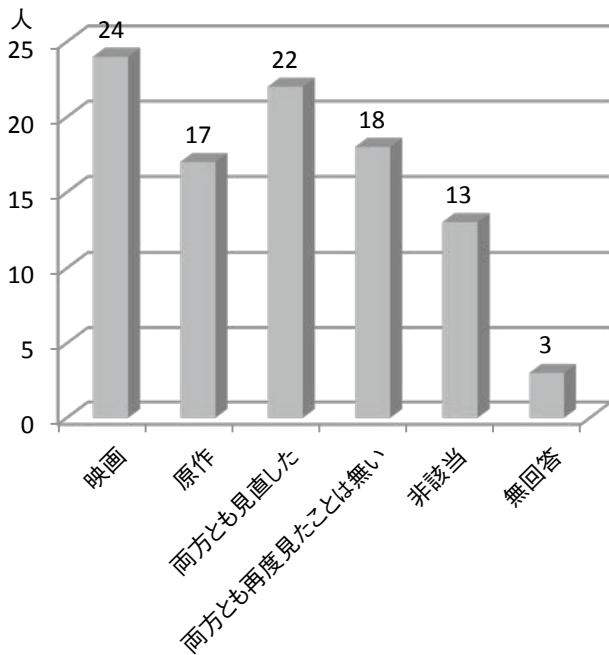


図8 映画と原作を両方みた後の再視聴読

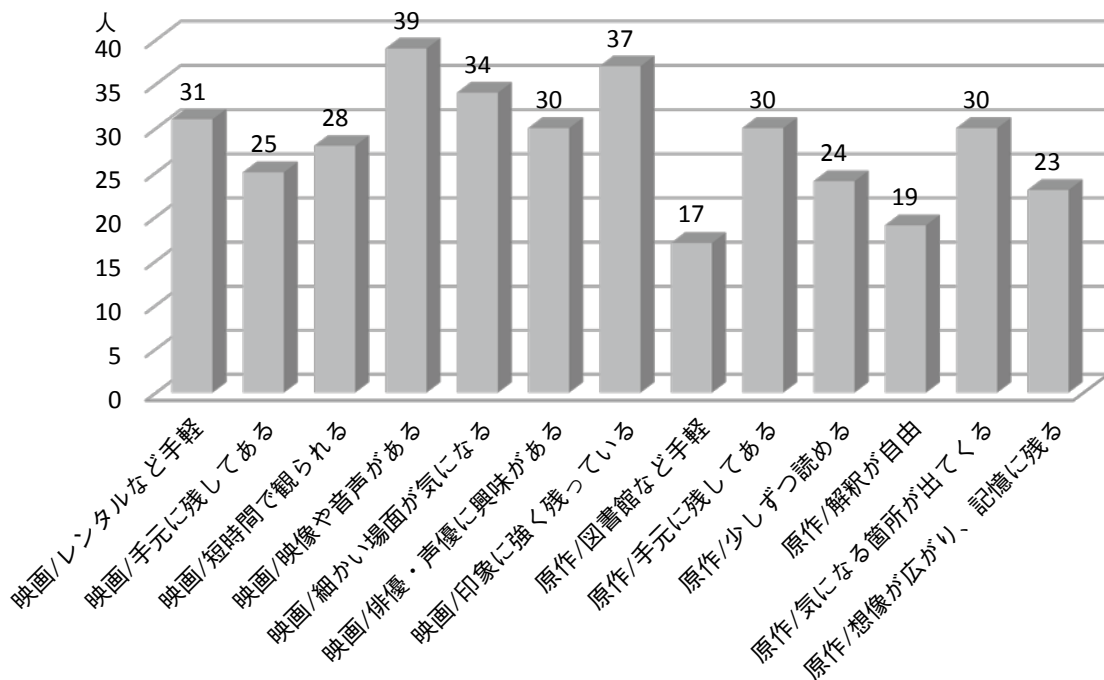


図9 原作と映画を両方みた後、再度みた理由

結びにかえて

原作（書籍）と映画の差異と物語世界

現在の若者（学生）の原作（書籍）と映画へのアプローチ行動の実際を探るべく、このアンケート調査を行った。データに現れた学生達の行動は、映画と原作をほぼ同じ割合で先にみているなど、一言でいうならば、バランスのとれたものであった。一方で、今回の

この調査のバランスの良さも全体としてみた時の数字であり、個々の回答は片寄りが大きかった。

活字、読書離れが叫ばれる昨今、各種世論調査でも、月平均に読む平均冊数が1.6冊⁵や1冊以上読んだ人が51%（内1冊が20%）⁶となっている。しかしながら、この世論調査結果が掲載された読売新聞の同日の

5 『読書世論調査 2015 年版』（毎日新聞社、2015 年）

6 読売新聞社「読書週間世論調査」（読売新聞、2015.10.18 掲載）

記事で「単純な比較はできないが、面接方式による1995年から2014年までの調査では、1冊以上読んだ人と、1冊も読まなかった人との割合はいずれも50%前後で推移している。今回も大きな変化はないようだ。」とも書かれている。とは言え、この20年間で若者（学生）の活字への親しみ方に変化があるように感じられるのも事実である。

ここで、原作と映画を両方みる場合の、先にみる理由に目を向けると、「映画の方が原作より理解しやすいから、原作より映画を先に観る」学生の割合が44%を占めていることがわかる（図3）。このことから、物語を活字から読み解くことに魅力を感じない若者が増えていることも推測される。一方、原作を先に読む人の理由の「先に自分なりの解釈をしたい」「先に自分で主人公などをイメージしたい」の合計（図4）も45%を占めている。

協明子氏が子どもの読書の大切さについて、「読むという精神活動に含まれていて、映像メディアでは置きかえのきかないことは何かというと、それはまず書き言葉レベルの言葉を使う力であり、次に想像力であり、第三に全体を見渡して論理的に考える力だと思います」（協 2005：140）と述べている。さらに、映画やアニメの映像の問題点として「映像でどうしても気になるのは、動いて音の出る映像が観る者を支配し、同時に自分の意識をも働かせることをほとんど不可能にしてしまうことです」（167－168）と指摘している。これらの指摘は、三つの力を使いながら、本を読み解くということは能動的な作業であり、映画を観ることは受動的であると言っているとも考えられる。

映画は、映像と音声など五感に訴え、大変強い印象を私たちに与え、記憶にも残る。鑑賞も気軽に労力をあまり使わずに行える。このことが、2回以上観ることにもつながっていよう（図8）。原作も、読後記憶に残る点では同様であるが、読み解くのに映画より労力が必要とされる。しかしながら、自分で活字から読み解くことにより、自分の中で物語世界が広がり深まり、一旦自分なりに解釈すれば、その後、印象の強い映画をみても自分が描いた物語世界は残り続けるであろう。

もう一度、興味・関心と原作読後のクロス集計の図

5と図6に着目したい。図5で「映画が好き」なグループも映画鑑賞後50%が「原作も読みたくなる」と回答している。良質の映画を観ることにより、原作を読みたくなる可能性は大きいと言えよう。次に図5と6を比較すると、「書籍が好き」なグループは映画を観た後（図5）では「映画と原作の関連は気にしない」と答えた人は存在しなかったにもかかわらず、原作（書籍）読後では「関連を気にしない」と答えた人たちがいる（図6）。原作（書籍）と映画の「関連を気にしない」のであるから、本来なら回答者は、「映画鑑賞後」と「原作読後」で同数存在するはずである。この「原作読後」に「関連を気にしない」人が現れた現象は、読書という能動的な行為で、自分の中に自分なりに確立した物語世界を構築したことにより、映画との関連を気にしなくなったからだとは考えられないだろうか。これらの回答から力のある映画や本により物語に出会うことの大切さを感じる。

読売新聞社の世論調査上に現れているように、たとえ読書率に変化は見られなくとも、その手にとる書籍自体の内容、活字の分量にこの20年間で変化がみられるのではないだろうか。簡単に読むことができ、分量も少ない本が増えているのではないだろうか。

書籍と映画の関連に注目すると、今回の調査のなかで図8、図9に示している、映画と原作を両方みた後、映画や原作を再度みたことのある63名は、力のある映画や本、すなわち良質の物語が描かれた作品に出会った可能性があると言えるかもしれない。映画や原作を見直すことで、1度目には気づかなかったことに気づいたり、自分も別の感想を持ったりすることで、作品を再度楽しむことに加え、自分の変化や成長に気づくこともある。さらに、力がある作品に会えば、次には別の映画や本を観たくなる可能性も含まれているかもしれない。

協氏も指摘しているように、確かに映画は人が解釈し、作った作品を受け止めながら観るので、自分の思考、想像力は休みがちかもしれない。また、「本に比べて理解しやすいから」という学生の割合が多いのも、人から答え、方法を教えてもらってから本を読む方が楽だ、という学生が多いということでもあろう。しかし、映画を観た後、本を読もうと思う学生がい

る、ということが重要ではないだろうか。映画から本への関連、橋渡しが確実に存在するということを示している。

仮説2の「映画を観た人は、原作も読む」のアンケート結果は仮説と異なり、映画を観た人も原作を読んだ人も互いに興味を喚起し合う割合は、ほぼ同率であったことが結果に現れた(表1、2)。少なくとも現在の鹿児島大学生においては、違った特性を持つ二つのメディアが同じバランスで互いに興味を喚起し合っていると言えよう。マーシャル・マクルーハンが「非言語的経験形態としての映画は、統辞語をもたない陳述形態である写真と似たところがある。ところが実際は、映画は印刷や写真と同じように、その利用者に高度の識字能力があることを前提としているため、非文字文化的な人間を当惑させてしまう」と述べている(マクルーハン 1987:294)。本来、映画は文字文化圏の私たちこそ無理なく受け入れられるメディアであり、この二つのメディアは相性がいいと言えるのかもしれない。

今後に向けて

近年、絵本を読むためではなく、保護者と赤ちゃんと絵本を開く楽しいひとときを分かち合うことを目的としたブックスタートが注目され、それに取り組む地方自治体も943市区町村(2015年12月31日現在)⁷に上っている。また、子どもが自分で本を読むだけでなく、読み聞かせの重要性も広く言われ、家庭や図書館の施設等で読み聞かせにより絵本に親しむ機会も多いと考えられる。

はたして、このような活動の効果は出てきているのか、今後、可能であれば高校生や中学生にも同様の調査を実施し、段階的な年齢の比較考察も行いたい。

今回は、学生の行動をみるアンケートであり、原作(書籍)や映画の内容については調査していない。しかし、いい作品に出合えばその後の行動が変わる可能性を感じさせるアンケートであった。物語作品自体に力のある、想像力を刺激するような原作に出合えば、

自分で読み解く能動的な行為への興味が増すのではないだろうか。その結果として、映画から先にみる理由の「原作より映画の方が理解しやすい」と回答する学生数が減少し、「映像・音声があるから映画を先に観る」割合が増加する可能性はないのだろうか。また、原作が先に出版されている、その時制の通り「原作を先に読む」学生が増加する可能性はないだろうか。

今後、このアンケート調査結果を踏まえて、映画と本の同じ箇所場面を複数見てもらい、メディアによる受け取り方の差異を調べるなど、具体的に映画と書籍の内容、差異についても調べたい。また書籍と映画を詳細に読み解き、特性を研究し、映画と本の相乗効果の可能性について調べたいと思う。この二つのメディアを活かし、物語世界を楽しむことにより、活字へ親しむ方法は見つけられないかを探求したい。

参考文献・参考 URL

NPOブックスタート

「実施自治体一覧」

<http://www.bookstart.or.jp/about/ichiran.php>

2016/2/23アクセス

鹿児島大学

「鹿児島大学の概要(資料編) 入学定員・現員数
2014年5月1日現在」

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/teiinn-gakubu.pdf> 2016/01/23アクセス

新村出(編)

2008『広辞苑』岩波書店

毎日新聞社

2015『読書世論調査2015年版』毎日新聞社

読売新聞社

2015年10月18日「読書週間世論調査」『読売新聞』

脇明子

2005『読む力は生きる力』岩波書店

はまだ
濱田 みゆき

鹿児島市在住。放送大学大学院文化科学研究科修了。

7 NPO ブックスタートホームページ

原作と映画についての調査
—ご協力のお願いと調査票への記入上の注意—

私は現在、鹿児島大学院人文社会科学研究所にて、「物語」の研究を行なっております。

そこで、これまでご覧になった「原作（書籍）」と「映画」について、鹿児島大学学生の皆様にアンケートをお願いする次第です。

お忙しいなか恐れ入りますが、ご協力どうぞよろしくお願いいたします。いただいたご回答は、個人が特定できない形式でコンピュータに入力して作業・分析いたします。また、無記名のアンケートですので論文や結果報告の中で個人が特定されることはありません。調査票は分析後、裁断処理にて廃棄いたします。

なお、回答結果は後日『プロジェクト研究報告集』に掲載いたしますので、関心のある方はそちらをご覧くださいませようよろしくお願いいたします。

ご質問、ご不明の点などありましたら、下記までお問い合わせいただきますようお願いいたします。

鹿児島大学院人文社会科学研究所竹内研究室

濱田みゆき
連絡先

回答は、該当する選択肢の「番号」に○をつけておこなってください。

あなたがこれまでご覧になったことのある、原作（書籍）があり映画化された作品に関する、原作・映画についての質問です。

*** 今回の調査の原作には漫画・絵本は含みません。活字による原作（書籍《電子書籍含む》）についての質問です。**

*** 映画は劇場、レンタル、テレビ放送など視聴方法及びジャンル、実写やアニメは問いません。**
例：『ハリー・ポッター』『図書館戦争』など（シリーズ作品もその中1作品についてのお尋ねです）

I（1）原作（書籍）と映画への興味（関心）についてお尋ねします。

1. 映画も書籍も好き 2. 映画の方が好き 3. 書籍の方が好き 4. 両方とも好きでない

（2）映画と原作（書籍）の関係についてお尋ねします。

映画を観た後についてお尋ねします。下記の中から最も当てはまるものを選んでください。

1. 映画を観ると、原作も読みたくなる
2. 映画を観たら、原作は読まない
3. 映画と原作はそれぞれ別物であり、関連は気にしない
4. これまで、原作のある映画を観たことがない

（3）原作（書籍）と映画の関係についてお尋ねします。

原作を読んだ後についてお尋ねします。下記の中から最も当てはまるものを選んでください。

1. 原作を読むと、映画も観たくなる
2. 原作を読んだら、映画は観ない
3. 原作と映画はそれぞれ別物であり、関連は気にしない
4. これまで、映画化された原作を読んだことがない

裏面へお進みください

(4) 原作(書籍)と映画を両方みる場合、どちらを先にみる人が多いですか。

1. 映画を先に観ることが多い → (5) へ
2. 原作を先に読むことが多い → (6) へ
3. どちらも決まっていない → II へ

(5) (4)の回答「1. 映画を先に観ることが多い」を選んだ方のみお答えください。

映画を先にご覧になるのはなぜですか？最もあてはまるものを一つだけ選んでください。

1. 映画は、映像や声や音楽など音声があるから
2. 映画のほうが原作を読み解くより、簡単に理解しやすいから
3. 原作があることを知らずに、映画から観るから

(6) (4)の回答「2. 原作を先に読むことが多い」を選んだ方のみお答えください。

原作を先にご覧になるのはなぜですか？最もあてはまるものを一つだけ選んでください。

1. 先に原作を読んで、自分なりに解釈したいから
2. 先に活字で読んで、主人公などを自分でイメージ(想像)したいから
3. 自分の解釈と映画(監督や脚本)の解釈とを比較したいから
4. 原作の方が先に出版されているから

II 原作(書籍)も映画も両方みた作品がある方のみにお尋ねします。

(1) 原作も映画もご覧になったのはどうしてですか？あてはまるものを選んでください。

(複数回答可)

1. 原作を読んだら、映像(アニメ含む)や音声のある映画でも観たくなったから
2. 原作を読んだら、自分の解釈と映画の解釈とを比較したくなったから
3. 原作を読んだ後、自分の好きな俳優や声優がその映画に出演したから
4. 映画を観たら、映像や音声を原作ではどう表現しているのか、読みたくなったから
5. 映画を観たら、原作ではどう書かれているのか、読みたくなったから
6. 映画を観たら、あらすじや意図がつかめたので、原作でも読みたくなったから

(2) 原作と映画の両方ご覧になった後について尋ねします。

同じ映画や原作を(最初から最後まで)再度見直したことがありますか

1. 映画は、同じものを再度観たことがある → (3) へ
2. 原作(書籍)は、再度読んだことがある → (3) へ
3. 映画も原作も、再度みたことがある → (3) へ
4. 映画も原作も、再度みたことはない → III へ

- (3) (2) の回答選択肢 1～3 を選んだ方にのみお尋ねします。
それはどうしてですか、各項目についてお答えください

	あてはまる	あてはまらない
① 映画はレンタルなど手軽にできるので、また観たくなるから	1	2
② 映画は手元に残してあり、また観たくなるから	1	2
③ 映画は短時間で観ることができるので、また観たくなるから	1	2
④ 映画は映像や音声があるので、また観たくなるから	1	2
⑤ 映画は細かい場面が気になり、また観たくなるから	1	2
⑥ 映画は配役（俳優、声優など）に興味（関心）があるので、また観たくなるから	1	2
⑦ 映画は印象に強く残っているので、また観たくなるから	1	2
⑧ 原作は図書館などで手軽に借りることができるので、また読みたくなるから	1	2
⑨ 原作は手元に残してあり、また読みたくなるから	1	2
⑩ 原作は少しずつ空いている時間に読み進めることができ、また読みたくなるから	1	2
⑪ 原作は自分の好きなように解釈できるので、また読みたくなるから	1	2
⑫ 原作はあとから気になる個所が出てくるので、また読みたくなるから	1	2
⑬ 原作は、自分の想像が広がりやすく、記憶に残るためさらにまた読みたくなるから	1	2

Ⅲ 最後に、あなたご自身について伺います。
当てはまる選択肢に○をつけてください。

あなたの性別 1. 男性 2. 女性

あなたの年齢 1. 20 歳未満 2. 20 歳代 3. 30 歳代 4. 40 歳代
5. 50 歳代 6. 60 歳以上

* ご協力どうもありがとうございました。 *

天正・慶長使節のスペイン訪問

—その表象のあり方と影響—

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース1年
ホルヘ・ガルシア・アロヨ

はじめに

天正と慶長の遣欧使節は、日本人によるスペインとバチカンへの最初の外交訪問であった。天正使節(1582年～1590年)は主にイエズス会によって計画された。日本にいたイエズス会の神父、特にアレッサンドロ・ヴァリニャーノは彼らの伝道力を強化するため、より多くの神父を必要としていた。そのためにイエズス会の神学校で教育を受けていた4人の若い日本人、伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノを使者としてヨーロッパへ派遣した。1580年以来ポルトガルはスペインに属しており、日本にいるイエズス会宣教師はほぼすべてポルトガル人であったので、スペインは彼らによって布教と貿易を促進したいと考えていた。そこでフェリペ二世は、イエズス会の偉大な支援者教皇グレゴリウス十三世の協力を得るために、この外交訪問に承認を与えた。一方、日本では豊臣秀吉がキリスト教に対する寛容的な政策を実施していたため、そうした社会状況も使節派遣を後押しした。4人の若者はポルトガル、スペイン、イタリアのいくつかの地域を訪問した。たとえば、スペインではマドリッド、ムルシア、アリカンテ、バルセロナ、イタリアではヴェネチア、ジェノヴァ、ローマなどである。1587年、日本で豊臣秀吉がキリスト教信者への迫害を始めたため(バテレン追放令)、彼らはスペイン国王と教皇に謁見することはできたが、商業的、宗教的な合意には達しなかった。

その後、再び日本からスペインとバチカンへ別の外交代表団が送られた。これは慶長使節と呼ばれる(1613年～1620年)。今回の使節は、フランシスコ会の

神父のルイス・デ・ソテロと大名の伊達政宗によって主催された。ソテロは日本におけるイエズス会による布教推進のため、スペイン国王と教皇に、より多くの宣教師の派遣を願った。一方で、伊達政宗はメキシコ(イスパニア)との貿易協定を望んでいた。使者は支倉常長、伊達政宗の部下、ソテロと彼たちの同行者で、日本の商人はローマ到着までにスペイン(コリア、セビリア、マドリッド、サラゴサ、バルセロナ等)と、イタリア(ジェノヴァ、フィレンツェ、ローマ等)のさまざまな都市を見学した。しかし、日本におけるキリスト教に対する態度は豊臣秀吉の時代よりさらに悪くなっていたため、またしてもスペイン国王と教皇に謁見はできたものの、当初の目的を果たすことはできなかった。

二つの遣欧使節団はどちらも十分な成果を上げることはできなかったが、日本の使者は、現在まで続くヨーロッパ世界と日本の友好関係の始まりとなった。本研究の目的は、これらの二つの使節がスペインにおいてどのように記述され、表象されたか、さらに彼ら日本人がスペインに対してどのようなイメージと影響を与えたかを明らかにすることにある。

1. ヨーロッパ人から見る日本人

—天正・慶長使節に関する史料から—

両使節にはあらかじめ決まった旅程があったが、その旅程の中で、スペインとイタリアのいくつかの都市を通過することになった。それらの都市において、日本人の大使の来訪に関する記録が数多く残されている。本稿においては、この中から日本の使節について

のヨーロッパ人の感想や反応が書かれた信憑性の高い史料を取り上げながら、遣欧使節の表象について考察していく。

1.1 天正使節

フェリペ二世との謁見

天正使節にとって最も重要かつ重大なイベントは、フェリペ二世との謁見であった。この謁見の様子はイエズス会の神父のルイス・フロイスによって書かれたクロニック「Tratado dos Embaixadores Japoes, 日本の大使の条約」に記載されている（私が使用したバージョンは、フェルナンド・ボウザの記事「“Ardides del Arte”, 芸術のトリック」に含まれるものである）。

【史料A】

“Felipe II los recibe en la Torre Dorada del Alcázar, acompañado por sus tres hijos, de pie, vestido de negro, el collar del Toisón al cuello, con capa y espada, apoyado sobre un bufete, como solía en las audiencias a los embajadores. A los japoneses los describe vestidos al modo japonés, armados con espadas y calzados con sandalias. El rey abandonando su postura protocolaria y movido por la curiosidad, se adelantó a tocar la tela de sus ropas, sus guantes y pidió que uno se descalzara para observar sus sandalias de cuero, al igual que su espada y vaina”¹.

（フェリペ二世は、彼の3人の子供を伴って、マドリッド宮殿のゴールデンタワーで大使を引見した。王は首の回りにゴールデンフリースの襟をまとい、黒い衣類を着て、マントと剣を身に付けて立っていた。フェリペは、しばしば大使との謁見で行ったように、机の上に肘をついていた。日本人は日本風の服を着用し、剣で武装し、サンダルを履いていたとフロイスは記述している。王は彼の礼儀の位置を離れて、好奇心から彼らの服と手袋の生地に触れるよう前に進んだ。彼はまた、サンダルの革を近くで眺めるために日本人のい

ずれかに“脱いでください”と頼んだ。さらに、剣と鞘も近づいて眺めた。）

確かに、日本人は、見慣れない衣服によってヨーロッパ人に好奇心を喚起するつもりだった。この若い使者は、高官との会合で日本風の服を着て、袴と草鞋を着用したが、一方で別の時間にはヨーロッパ人の騎士のような服装をしたことがわかっている²。さらに彼らは、有馬（長崎県）の神学校で欧州の習慣をよく身に着けていたので、それほど異質な感じを与えることなく受け入れられ、そのため多くの場合、本物のヨーロッパ人のように表されることになった³。

ルイス・フロイスの史料に戻ろう。フェリペ二世は禁欲的で、真面目で、厳密で、かなり内気な男であったため、彼が若い使者を引見した時に礼儀を無視して席を立てて使節に接したことは、王にとって日本人のインパクトがいかに大きかったかを物語る。

ムルシアでの歓迎

アリカンテの港を経由してイタリアに移動する前、日本の大使はスペインの南東のムルシアという町を訪問した。彼らはサン・エステバン修道院で宿泊したため、ムルシアの滞在は非常に象徴的であった。なぜなら、あの修道院は、ポルトガルの降下エステバン・デ・アルメイダによって設立された、スペインの最初のイエズス会の重要な機関の一つであったからだ。次の【史料B】（これも、フロイスによって書かれた）はこの町の歓迎の様子を詳述する。

【史料B】

“Una legua antes, salió a recibirles el Corregidor con la gente principal de la ciudad y muchos eclesiásticos que pasarían de cien a caballo; pero, ya antes, desde media legua, les daba escolta una compañía de tres mil arcabuceros (...). Entre tanto, un concierto de músicos tañían sus instrumentos y repicaban las

1 Frois, Luis, *Tratado dos Embaixadores Japoes* en Bouza Álvarez, Fernando, “Ardides del Arte. Cultura de corte. Acción política y artes visuales en tiempos de Felipe II” capítulo de la obra de VVAA, *Felipe II. Un monarca y su época. Un Príncipe del Renacimiento* (Madrid. 1999, PP57-82)

2 Rodríguez de Diego, Julia T., catálogo de la exposición *En Busca del Sol Naciente. Las Embajadas Tenshou y Keichou*. (2013, PP10, 17).

3 上と同じ (P17)

campanas”⁴.

“Más, era tal el gentío que se agolpaba en la puerta de S. Esteban, que el propio Corregidor hubo de abrirles paso a la fuerza, quebrando dos varas en las costillas de los curiosos más próximos”⁵.

(市内まで約5キロメートルの所へ来た時に、彼らを迎えるために、市長と百人以上の馬に乗った聖職者が出てきた。そればかりか、その少し手前、市内まで約6キロメートルの所まで、大使は三千の銃士に護衛されていた。一方、音楽家の大規模なグループは楽器を演奏し、鐘を鳴らした。

サン・エステバンの扉の前は多くの人々が群がったので、市長は日本人のために力で通路を確保する必要があり、その結果、2本の警備用の棒は近くにいた見物人の肋骨によって折れた。)

この史料はスペインの当局が若い使者を手厚くもてなしていることを示している。これは、スペインを公式に訪問する、今回のような遠来の使節は初めてであったからで、そのためスペイン国王とその政府は、彼らにとって喜ばしい滞在となるよう最大限の配慮をした。

一方で、この史料では、彼らを見るために多数の人々が集まったことも記されている。一般の人々にとっては、遠く離れた東洋からの来訪者は初めてであり、この魅惑的な異邦人の姿を一目見たいと思ったに違いなかった。両国—スペインとイタリアのほぼ全て一の若い日本人が訪問した都市では、どこでも人々は熱心に彼らを観察し熱狂したのであった。

ヴェネチアでの歓迎

ムルシアを後にした大使一行は、エルチェとオリエラに寄って、アリカンテに向かった。この町でイタリアへ船で乗り出した。イタリアでも、彼らはローマに来る前にいくつかの都市を訪問した。これらの都市の一つがヴェネチアであり、そこは当時のイタリアで非

常に重要な都市であった。次の「史料C」は、フェリペ二世に宛てたキルストバル・デ・サラザール—ヴェネチアでスペインの前大使—からの手紙である。この手紙の中でサラザールは、ヴェネチアで若い日本の使者に対する歓迎会の模様について王に報告する。

【史料C】

“a los 26 deste entraron aquí los cuatro indios de Japon(...)concurrió gran número de gente a verlos(...). Presentaron al Dux (durante la audiencia con él) una cimitarra, unos cuchillos y dos ropas y una cadisa al uso de su tierra”⁶.

(26日はここで4人の「日本のインディアン」が来た。(中略) 彼らを見るために多くの人々が群れ集まった。(中略) ヴェネチアの元首の謁見中) 彼らは元首にシミター、ナイフ、と彼らの国風の服を渡した。)

この史料でまず注目すべきことは、スペイン大使の伊東マンショたちを表すために使用される単語である。サラザールは彼らを「インディアン」と呼んでいる。この言葉を使用することで、彼らが遠く離れた異国からの使者であることを強調している。なぜなら、サラザールの意見では、日本人は当時の広大なスペイン帝国に属する南米のネイティブインディアンのように遠く異国的な人物ということである。一方、彼らを「インディアン」と呼んでいることを考えると、サラザールが植民地としての日本を考えた可能性もある。つまりサラザールにとっては、日本は欧州の王国と同じレベルではなかったはずである。

さらに、彼は日本人を見るために多くの人々が集まったと報告している。ここでも「史料B」のように、巨大な好奇心を持って一般の人々の大群衆が日本人たちを見に集まった。これは当時、人生で一度起こるかどうかというイベントであったであろう。

引用の後半部分、すなわち日本の若い大使がヴェネチアの元首にプレゼントを贈呈する部分を見てみよう。使節は、スペインとイタリアの当局のために様々

4 Frois, Luis, “Itinerario de la Misión Sowa por el Sureste Hispano” en *Historia do Japao* (ミラノ, 1667年, P657) en Guillén Selfa, José *La Primera Embajada Japonesa en Europa y Murcia (1582-1590)*. Región de Murcia. Consejería de Cultura y Educación. (1997, P90)

5 上と同じ。

6 *Carta de Cristóbal de Salazar, embajador en funciones en Venecia, a Felipe II, informándole de la recepción de la embajada y las celebraciones hechas en su honor*. AGS, EST-LEG, 1341.34 (シマンカス国立公文書保管所。1585年6月29日)

の贈り物一大小と日本風の衣装—を持って行った。そして彼らは、ヴェネチアの元首にも同じプレゼントを贈呈した。ここで興味深いのは、サラザールによるプレゼントの説明である。サラザールは彼らの刀と脇差を、このヴェネチアで初めて見たため、よく知っている西洋の器物、すなわちシミターやナイフとそれぞれ表現した。シミターの起源は中東にあり、ヨーロッパ人は十字軍でアラブ人に対したときにその剣を知り、オスマン帝国に対する戦いによってよりよく知られた剣であった。種々の形態をもつシミターであるが、当時のヨーロッパ人は東洋起原のこの剣を、形を変化させながら使用していた。さらに王の理解を得やすくするために、サラザールはヨーロッパの想像力で簡単に理解できる用語を使用しなければならなかった。なお、元首に渡した衣服についての詳細はわからない。

ローマでの歓迎

ジェノヴァなど他のイタリアの都市通過した後、伊東マンショたちは彼らの最終かつ重要な目的地であるローマに到達した。永遠の町ローマで、彼らは教皇グレゴリウス十三世と会談し、さらに次の教皇ピウス五世の戴冠式に出席した。

天正使節に関して分析する最後の史料は、ヴェネチアのスペイン大使クリストバル・デ・サラザールに宛てた、ローマでスペインの大使の秘書をしていたエルナンド・デ・トーレスが書いて送った手紙である。この手紙の中でトーレスは、ローマで滞在中の若い日本の使者に対する感想を伝えている。

【史料D】

“Son mozos de 10 a 12 años. Todos, lindos ojos, manera de señores, sosiego y gravedad(...)Lo que dá que maravillar es que, siendo éstos hijos de tan grandes y poderosos reyes, cómo han venido sin dineros y sin hombres, que solos los padres del Jesús han venido con ellos.

(Durante la audiencia con el Papa) Ellos vestidos de teletas de mil colores con calzones marinarescos, casaquilla, guantes con perlas, con alfanje a la indiana, capeletos pardillos hechos aquí, con muchos

oros y plumas(...)Beben agua caliente siempre”⁷.

(彼らは、10～12歳の少年だ。みんな美しい目であり、絶妙なマナーがある。(中略)非常に穏やかで真面目な人々である。(中略)少し驚かれたことは、彼らは大名の息子であるにもかかわらず、金もなく側近もおらず、イエズス会の神父たちだけが付き添ってきたということであった。

(教皇との謁見中)彼らは多くの色の布に、船員のズボン、小さなドレースコート、真珠の手袋、インディアン風のカットラス、当地で作った帽子、多く金の物と羽を身に着けており、(中略)いつもお湯を飲んでいる。)

最初の部分で、トーレスは日本人と彼らの行動を記述する。彼は、伊東マンショたちの目は美しいと言う。これは日本人の目について言及した唯一の史料である。この史料では、ヨーロッパ人と日本人の目の差異はトーレスの注意を惹き、彼は美しいと形容している。またトーレスは、彼らの非常にいいマナーと穏やかで真面目な行動を強調している。しかしそれは、トーレスだけが日本人の優れた性質を褒めているわけではない。伊東マンショたちが滞在したベルモンテ学校の学長でイエズス会の神父であったルイス・デ・グスマンも、彼の年代記の中で若い大使の素晴らしいマナー、そして日本人が政治的、宗教的な義務を真面目に実践していることに感動していた⁸。

一方トーレスは、彼らは大名の親族であること、金もなく側近もなしで来たことに驚いた。確かに伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアンと原マルチノは、九州でキリスト教の最も強力な大名である有馬晴信、大村純忠と大友宗麟の親戚であった。そして当時、歓迎してくれる国の当局を感動させるために普通は外国の大使は大金を持ち、側近たちを連れていくものであった。したがって、トーレスは、大使が裕福な家の

⁷ Carta del secretario del embajador en Roma, Hernando de Torres, al embajador en Venecia, Cristóbal de Salazar. AGS, EST-LEG, 1535,74 (シマンカス国立公文書保管所。1585年4月6日)

⁸ Guzmán, Luis de, S.I. *Historia de las Misiones de la Compañía de Jesús en la India Oriental, en la China y en Japón, desde 1540 hasta 1600* en Guillén Selfa, José *La Primera Embajada Japonesa en Europa y Murcia (1582-1590)*. Región de Murcia. Consejería de Cultura y Educación (1997, P89)

出身者にもかかわらず貧弱な一行の様子に驚いたのであろう。

最後の部分で、トーレスは4人の少年の衣服を説明する。彼は、彼らが身に着けた様々な色を強調した。これは明らかに暗い色が優勢するスペインの衣類のあり方と対照したものであろう。当時スペインでは、黒色は最大限優雅であると考えられた。スペインはヨーロッパで最強力国であったため、スペイン人の服装は全体の大陸に広がった。さらにトーレスは、船員のズボンに言及する。このズボンは使節の若者が着用していた袴のことである。当時、船乗りがはいていたズボンは非常に幅が広がったため、トーレスは袴のことを「船乗りのズボン」と表現したものと思われる。それは何らかの形で袴にあのズボンに似ているかもしれないけれども、ここで注目すべきことは、この記述にヨーロッパ的な想像力が表れているということであった。このような例は先述したように、刀の説明にも見られたことである。トーレスは刀をカッタスと表現している。カッタスは古来ヨーロッパで使用されていた東洋起原のサーベルであった。中国刀はカッタスの種類であり、それは日本の刀の起源であったので両方の剣は似ている。そしてヨーロッパ人は、13世紀の中国との最初の公式接触からあの中国刀を知っていたため、その理由でトーレスは刀にインディアン風のカッタスをあてたのであろう。服についてのトーレスの記述についての分析は、紙幅の都合で省略することにする。

最後に、トーレスが日本人は常に湯を飲むと述べていることに触れておきたい。もちろん、この湯は「茶」という意味である。茶は、16世紀末では、ヨーロッパでほとんど知られていなかった。なぜなら欧州での茶の貿易は、オランダ人がアムステルダムに茶を持っていった時、すなわち1610年に開始された⁹。したがって、トーレスにとっては日本人の少年がいつもあの「湯」を飲んでる姿をとて好奇心に満ちた目で見つめていたのである。

1.2 慶長使節

コリアとセビリアでの歓迎

支倉常長一行のスペインでの最初の滞在地はコリア・デル・リオというセビリア（スペインのアンダルシア地方、南部）の小さな町であった。ここを経て彼らはセビリア市に入り、この町で市当局から大歓迎を受けた。エスキオネ・アマティによって書かれたこの旅の公式クロニクルから抽出された次の〔史料E〕は、コリア・デル・リオからセビリアへの道とその町の歓迎ぶりを物語る。

〔史料E〕

“A’Vent’uno d’Ottobre dell’anno medesimo la Citta (Sevilla) fece un’altra dimostrazione di maggior cortesia, ricevimento dell’Ambasciatore, e del Padre Sotelo, mandando carrozze, cavalcature, e gran numero di cavalieri, e altra nobilita, che lo servissero con ordine di cavalcata, e in forma grave. Onde uscendo l’Ambasciatori de Coria, videro con olta ricreatione l’honore preparato, la pompa de’ cavalieri, e cavalli, e il numero grande della gente, che l’accompagnò sei miglia lontano a Siviglia. Avvicinatosi a Triana, prima di passar il ponte, si moltiplico di maniera il concorso delle carrozze, cavalli, e gente de ogni genere, che non bastava la diligenza, e il rigore di due alguazili, e d’altri ministri di guistitia, per poder penetrare innanzi”¹⁰.

（同年（1614年）10月21日、街（セビリア）は、支倉とソテロ神父を歓迎と護衛のために、多数の馬車、馬、貴族を送り出した。コリアから出発した時、彼らは多くの騎士、馬と一般の人とを伴って、そして、この群衆はセビリアまで9キロ以上も付いてきた。トリアナ（セビリア市内）に近づいて、橋を渡る前、いろいろな階級の人々の数は三倍くらいにふくれあがり、警備員が通路を確保しようとしてもかなわないほどであった。）

この史料は、天正使節のように、スペインの当局が慶長使節に対しても盛大な歓迎ぶりを付与したという

9 Fuentes García, Miguel, *Té elixir de vida*. (Madrid, 2012, P15)

10 Amati, Scipione, *Historia del Regno di Voxu del Giappone...* (Roma. 1615, P31)

ことを示す。しかし慶長使節の場合、彼らが全ての通過場所でこのように歓迎を提供されたわけではない、例えばマドリッドではほとんど盛り上がりは見られなかった。なぜなら幕府によるキリスト教徒への弾圧の情報が入っていたからである。

またアマティは、とても特別な訪問者を観察するために好奇心に満ち溢れた民衆の数が非常に多かったということを指摘している。その群衆の多さで、ムルシアでの伊東マンショたちのように前に進むことができなかった。確かなことは、セビリアにおいては、日本人に関する一般的な人々の好奇心は無傷のままであったということである。さらに、彼らはセビリアに入った時に袴と草鞋を着用しており、この異国の装いによって人々の好奇心と熱狂はより高まったと思われる。

サントロペでの滞在

支倉たちはセビリアでしばらく過ごした後、マドリッドに向かった。首都で国王フェリペ三世に謁見して、支倉もフェリペ・フランシスコ・ファチクラというキリシタンの名前を付けて、洗礼を受けた。その後、彼らはバルセロナに行き、そこで船に乗ってイタリアに向かった。途中で大きな嵐に遭い、南フランスのサントロペの町でしばし滞在した。次の〔史料F〕ではこのフランスの町の町民の日本人についての印象が記述される。

〔史料F〕

[Q]uand ilz mangeoient ils ne touchent jamais leur chair sinon avec deux petits batons qu'ils tiennent avec trois doigts.

[I]lz se mouchoient dans des mouchoirs de papier de soye de Chine, de la grandeur de la main a peu prez, et ne se servent jamais deux fois d'un mouchoir, de sorte que toutes les fois qu'ilz ne mouchoyent, ils jestoyent leurs papiers par terre¹¹.

（彼らは食事時に自分の指で食べ物を全然触らないが、三本の指で握る二つの小さな棒を使用した。

彼らは“絹の紙”で自分の鼻を拭いて、彼らはこの紙を二度と使用しない。使用した後この紙を床に捨てる。）

このサントロペの予定外の滞在は、歴史の中でフランスと日本の最初の接触となった。当時のヨーロッパではしばしば手で食事したので、この史料のように南部のフランス人にとって日本人の食べ方は驚きであったはずである。

一方、17世紀のヨーロッパの衛生観念は日本と非常に異なっていた。例えばヨーロッパ人は、体を洗浄するために水を使用することは健康に悪いと思っていたくらいだから、彼らが、日本人が鼻をかむために紙を使用することに驚いたのは当然であったろう。

最後に、ローマでの歓迎の時の支倉と彼の日本人の側近の服についてコメントしたいと思う。側近の一人はヨーロッパ風の衣服を着て、他は日本風の服を着用した。一方で、支倉は豪華な日本の着物を身に着けていたが、被っていた帽子は西洋風であった¹²。支倉はちょうどマドリッドで洗礼を受けてクリスチャンになっていた。彼の側近の日本人も、支倉より先に洗礼を受けていた。ローマで教皇に謁見することは、使節の目的を達成するための最後のチャンスであったので、支倉たちは完全にクリスチャンになったことを教皇庁に印象付けたかったはずである。彼らはそれを示すために洋服を着用したのである。一方、同じ理由で彼らは、異国的な要因を失わないことでローマの当局の注目も喚起したかった。したがって、日本の服も着ていた。

天正・慶長使節はヨーロッパである種の旋風を巻き起こした。一般人にとっては人生で一度見られるかどうかのスペクタクルだった。史料に記述されている群衆は、王の戴冠または聖週間の行進のようなイベントとして集まったのである。しかし好奇心は一般の人々だけでなく、支配者層にも強い印象を与えるものであり、その結果、日本人の衣類と行動についての詳細な記述が残されることになった。通常の外国の使節に対

¹¹ *Relations du Mme. De Saint Tropez* (Bibliothèque Inguimbertaine, 1615) en Marcouin, Francis y Otomo, Keiko, *Quand le Japon S'ouvrit ou Monde* (Paris, 1990)

¹² Note 10と同じ (P61)。

しては、手紙で、史料にあるように（史料Cと史料D）使節のことを詳しく伝えることはなかった。これらの手紙の記述で興味深いのは、袴を船乗りのズボンと呼んだり、日本の刀を当時ヨーロッパでよく見受けられたシミターという剣と表記したりしていることである。つまりスペイン人は、日本人の身に着けている物や日本人の独自の振る舞い―袴、刀、または茶を飲んでいることなど―について、手紙を受け取る人の想像力が働くよう、ヨーロッパの物や習慣に適応させていることである。これらの手紙は王と他のスペインの当局に宛てたものであったが、ヨーロッパに適応させるこの方法によって、受信者は容易に使節の姿を理解できるものとなっただろう。支倉たちのサントロペでの滞在については（史料F）、日本人がフランスの地に足を踏み入れた最初だったため、天正使節の時のように好奇心からあの詳細な記述もなされたのであろう。

一方で、アマティによって書かれた支倉の旅の物語（史料E）はとても貴重な史料であるが、その目的はフランシスコ会からの使節の宣伝であった。彼も多くの場合、日本人の衣服を記述するにあたってヨーロッパに合わせて表現をしていた。

両使節の大使の着用した衣服について、この章で見えてきたように、彼らは和洋二つのスタイル―日本のスタイルと欧州のスタイル―を着用した。天正使節においては、日本からの最初の公式の外交使節でもあり、若い使者はヨーロッパに「近いイメージ」を演出するため、ヨーロッパ風の衣服を着用することを決めた。この「近いイメージ」は、有馬の神学校で伊東マンショたちよりヨーロッパの習慣と文化を摂取していたことによって増強された¹³。さらに、このように彼らは自分たちがキリスト教徒であることを強調したのである。

慶長使節がどのような衣服を着ていたのかという問題については、記録や絵画などの史料の限界があってその行程の一部しか追うことができないが、コリア・デル・リオとセビリアに入った時には、彼らが日本風の服を着ていたことは確かである。これらの町はスペインで最初の訪問地であった。彼らはスペインに到着

したことを知らせるために、日本風の服を着ることによってスペイン人に最初のインパクトを与える、つまり彼らの異国性、彼我の差異を見せようとしたと考えられる。もちろん〔史料E〕で見えてきたように、彼らを見るために大群衆が集まったのでこの目標は達成された。その一方で、支倉はセビリアで洗礼を受けることを受け入れなかった。それは彼が国王の目の前で、つまりマドリッドで行うことを望んだからであった。セビリアで支倉は、まだ完全にキリスト教徒になっていなかったのも、日本風の服を着ていたのもである。彼の側近の一部の日本人は、既にメキシコで洗礼を受けていたことは事実だが、支倉自身―使節の公式の報道官―はまだそれを受けていなかったのも、支倉に敬意を表して彼らも日本風の服を着用したと推測される。しかし支倉はコリア・デル・リオとセビリアで既に受洗した一行の者とともにロザリオを持ち、クリスチャンになる意志を示した。

マドリッドで、国王フェリペ三世は既に日本のキリスト教徒の状況が悪化していたことを知らされていたので、日本人に対する出迎えは非常に冷たかった。彼らのために華やかなセレモニーやパレードも行われることはなかった。しかし、宗教的なイベントである洗礼儀式は厳粛に行われた。この儀式には国王だけでなく、スペインの貴族たちも多く出席した。また、王の寵臣のレルマ公爵とその妻バラハス伯爵は、支倉の名付け親であった。したがって、この厳粛な儀式はそれにふさわしい服装が必要であったので、支倉はこのイベントを尊重し、カトリックに帰依することを示すために、キリスト教の騎士のごとく洋服を着用したと考えられる。

ローマに入った時、使節の目標は達成されていなかったのも、支倉たちは必死であった。ローマは、前述したように、何の成果もなく空しく帰ることを避けるための最後のチャンスであった。したがって、永遠の都市ローマで彼らは完全な視覚的な力を利用しようとした。彼らは、教皇に対して、彼らの異国性を見せることによって、非常に遠く異なっている人々がカトリックに改宗したこと、カトリック教の力がいかに遠くに及んでいるかということを示そうとしたのである。その結果、教皇が日本に司教職を確立することに

13 Note 2と同じ。

意味があると思わせることを企図したのだと考えられる。したがって、支倉は自らの異国性を全面に出し、このローマで彼の最も豪華な和服を身に着けた。一方、支倉はローマで既に完全なクリスチャンとなったので、マドリッドと同じように、カトリックへの服従を見せるために、例の洋風の帽子を被っていた。使節の目的には、メキシコと仙台の間に貿易ネットワークを確立することも含まれていたが、あくまで使節の主な目的は日本の司教職の設置であった。これはソテロの悲願であった。だから、私見では、このフランシスコ会の神父によって日本人の行動と衣服は決定されたと思われる。パウルス五世は支倉に「ローマ市民」という称号を付与したが、それ以外は何も達成できなかった。結局、ソテロのプランは失敗に終わったのであった。天正使節に関しては、私の視点からあの「近いイメージ」の印象を作るために、イエズス会の神父たちも伊東マンショたちに、振る舞い方と服装について提案した。しかしイエズス会の神父たちはソテロほどの関与は行っていない。なぜなら、天正の若い使者は日本からヨーロッパの習慣と文化を既に学んでいたが、支倉はヨーロッパについてほとんど何も知らなかった。彼は普通の侍であった。

両使節がスペインとイタリアの当局に影響を与えるために行ったこれら全ての努力にもかかわらず、日本のキリスト教徒の窮状に配慮されることはなく、二つの領域間にいかなる合意も成り立つことはなかった。

2. ヨーロッパ人から見る日本人 II

—天正・慶長使節に関する絵図—

両使節の訪問を機に豊かな絵図の資料が作られていた。その資料（絵画、版画など）を通じてヨーロッパ人は日本人に対してどのような表象を行ったのかを明らかにしたい。それを理解しやすくするために、私は使節を描いた同時代のスペインとヨーロッパの絵画を比較、分析する。

2.1 天正使節

16世紀のドイツで作成された天正使節を描いた版画¹⁴と、フェリペ二世の国務長官を務めたアントニオ・

ペレスの肖像画¹⁵は同時代に作成された。アントニオ・ペレスは当時の典型的な衣服を着用している。ペレスの服、帽子を含め、版画に表された大使の服と比べると、全く同じスタイルということが確認できる。日本人の顔の特徴も西洋人のように表現している。確かに、ドイツで作成された天正遣欧使節の肖像画の制作者は個人的に大使と会っていなかったはずだ。一方で、若い使者はヨーロッパ風の服を着ていた。さらに、彼らはよく欧州の行動と礼儀を知っていた¹⁶。これらによって彼らはヨーロッパ人に「近い」印象を与える¹⁷ことになった。それで、その印象はヨーロッパ全体に広がって、天正遣欧使節の肖像画のように、伊東マンショたちはヨーロッパ人の騎士として表現されたのである。

先と同じ理論は、ドメニコ・ティントレットによって描かれた伊東マンショの肖像画¹⁸に適用できる。私たちは、彼が日本大使であると知らなかったなら、彼が16世紀のヨーロッパの騎士であると言うであろう。描かれていた時、伊東マンショはティントレットの目の前にいたのに、このヴェネチアの画家は彼をヨーロッパの貴顕のように描いた。伊東マンショは実際にヨーロッパの服を着ていたかもしれないが、描かれた彼の顔の特徴は全く西洋風であり、ここでもヨーロッパの想像力に合わせて描いていることは注目すべきであろう。

2.2 慶長使節

アマティの『伊達正宗遣欧使節記』には、教皇パウルス五世に謁見する慶長使節を描いた挿絵（版画）がある。その挿絵の中央で教皇の前に跪く支倉たちは、長く緩い洋服を着用して、ターバンを被っている姿で描かれている。この版画と16～17世紀のオスマントルコ人を描いた絵画を比較すると、日本人はオスマント

14 天正遣欧使節の肖像画 "Newe Zeyttung auss der Insel Japonien" (1586年、アックスブルク)。京都大学図書館所蔵。ヨーロッパを訪れた四人の若い大使（中浦ジュリアン、伊東マンショ、原マルチノ、千々石ミゲル）と彼らの支持者イエズス会の神父ディエゴ・デ・メスキダが描かれている。

15 1585年にスペインの画家アロンソ・サンチェス・コエロによって描かれた。バルセロナの個人所蔵。

16 Note 2と同じ。

17 上と同じ。

18 ドメニコ・ティントレットによる1585年の絵画。イタリアの個人所蔵。

ルコ人のように表現されているように見える。当時のヨーロッパは近接するオスマン帝国の影響を強く受けていた。それで、東方からやってきた日本人を表象するのに、ヨーロッパの集団の想像力によって、ヨーロッパの国々と継続的な戦争を行っていたオスマン帝国の人々の姿を用いたものと思われる。

次に、国宝に指定されている支倉常長像¹⁹は大使の洗礼の機会に描かれた。この絵画で支倉の顔は断然アジア系の特徴を示している。その一方で、服はヨーロッパのスタイルである。史料では言及していないものの、当時宗教的なイベントのための礼儀で、彼はヨーロッパ風の服を身に着けないといけなかったはずだ。したがって、ヨーロッパの貴顕のように描かれた伊東マンショの肖像画とは異なり、この絵は事実を反映したものであると推測される。ただし、支倉の肖像画と同時代（17世紀）にヴェラスケスの弟子によって描かれたフェリペ四世の絵画²⁰を比較すると、支倉の絵画の組成物は完全にヨーロッパ風だ。注目すべきは、肖像画で支倉はヨーロッパ風の衣服を着用しているのに、まだ刀を持っていることだ。

また、支倉がローマで教皇と謁見した際に身に着けていた衣装を何うことのできる絵画²¹がある。色鮮やかな羽織袴を身に着けた支倉を描いたこの絵画は、先述したように、事実を反映したものである。しかし、その立ち姿を17世紀初頭にフェリペ三世を描いた肖像画²²と比べてみると、支倉はヨーロッパの騎士の典型的な姿で表現されている。

当時、特にカトリックの国では識字率が非常に低かったため、重要な事実を公表するために、絵の表現はより効果的な方法であった。したがって、一般の人が日本人のことをより理解しやすくするために、絵画表現もヨーロッパの想像力に合わせている。本章で見てきたように絵画表現が、特に天正使節の現実を反映しておらず、史料よりもっと積極的な想像力による適応を行ったのである。これは、日本人の姿をよく表現

するために必要であった。一方で、支倉の肖像画は現実に非常に近いものであったが、それが表示する姿は明らかにヨーロッパの騎士である。

まとめ

天正使節と慶長使節は、当時のヨーロッパで前例のないものであった。それまで日本人を見たことがなかったヨーロッパの人々は日本人に対して大きな好奇心を起こした。先述したように彼らを見るために多くの群衆が集まり、日本人の服や振る舞いの詳細な記録や絵画が多数残されることになった。ヨーロッパ人は記録、特に絵画で、日本人の最も理解しにくい側面をヨーロッパの想像力に適合させる形で記録し伝えた。

一方、日本人の大使はこの好奇心を誘発することで自分のメリットもあった。日本の使者—特に伊東マンショたち—は、欧州と日本の衣類と行動を組み合わせた。このようにして、彼らが遠くからきて、その文化は非常に異なっている、西洋の服装を身に着け、西洋式に振る舞うことで、ヨーロッパの人々に「近いイメージ」を与えることができたのであった²³。加えて、洋服の使用は彼らのキリスト教徒として地位を強調するものであった。慶長使節のように和服を着用して自分たちの異国性を強調したりもした。そのインパクトは、特にスペインで訪れた最初の町で顕著であった。セビリアでは、支倉はまだ完全なキリスト教徒ではなかったため、和服を身に着けた。このように彼らは、真のヨーロッパ人のように洋服を着るとともに着物も着用し、和服と洋服を場面に応じて使い分けたのである。マドリッドでは洗礼の儀式を尊重するべく西洋風の服を着る一方で、その後ローマでは自分の異質性を示し教皇を驚かせるために、豪華な和服を着用した。また彼は、既にクリスチャンであったので、それを示すためにヨーロッパの帽子も被った。とにかく、天正使節の若者たちはヨーロッパの習慣と文化を有馬の神学校で学んでいた²⁴ため、あの「近いイメージ」は、慶長使節においてよりも天正使節の時に、ヨーロッパ人によって受け入れられたと考えられる。

19 支倉常長像は17世紀に描かれた作者不詳の絵画である。仙台市博物館所蔵。

20 ヴェラスケスの弟子による（1658～1660年）。エル・エスコリアル修道院所蔵。

21 ローマを訪問した支倉を描いた17世紀の絵画。アルキタ・リチによる。ローマのクイリナレ宮殿所蔵。

22 ペドロ・アントニオ・ビダルによるフェリペ三世の肖像画（1615年）。プラダ美術館所蔵。

23 Note 2と同じ。

24 上と同じ。

さらにヨーロッパでは、両使節はカトリック教会、特にイエズス会とフランシスコ会にとって宣伝のために重要なものであった。修道会は使節の旅とその事実をヨーロッパ世界に知らせたかったのであり、これを実行するために、各修道会では両使節に関する多数の出版物を作成した。特に天正使節に関しては78冊以上の出版物が知られており、使節に対する反響の大きさがこれから明らかとなる²⁵。これらの出版物のうち、Acta Consistorii Publice Exhibiti a S.D.N. Gregorio Papa XIII. Regum Iaponorum Legatis—天正使節の大使は教皇に服従を誓うために開催された公共の儀式について書かれている1585年の書類—はヨーロッパ全体に広まり、両使節のことが、ヨーロッパ人によってより知られることに役立った²⁶。

天正・慶長使節のヨーロッパに与えた大きな影響にもかかわらず、日本でのキリスト教徒迫害と、いわゆる鎖国によって両使節は失敗に終わり、使節のことは忘れ去られた。その後スペインでは、19世紀半ばにセビリヤの古文書館の学芸員が、伊達政宗からセビリヤの当局に宛てた手紙と支倉が贈った刀を発見し、両使節に関する研究を始めた。1868年、慶長使節以来200年以上を経てスペインと日本との外交関係が再開された。

参考文献

Bouza Álvarez, Fernando,

1999 “Ardides del Arte. Cultura de corte. Acción política y artes visuales en tiempos de Felipe II” capítulo de la obra de VVAA, *Felipe II. Un monarca y su época. Un Príncipe del Renacimiento*. (Madrid)

Colomar Albajar, Maria Antonia y Lázaro de la Escosura, Pilar,

2013 Catálogo de la exposición *De Japón a Roma Buscando el Sol de la Cristiandad. La Embajada de Hasekura*. *Archivo General de Indias*. (Sevilla)

Guillén Selfa, José,

1997 *La Primera Embajada Japonesa en Europa y*

Murcia (1582-1590). Región de Murcia. Consejería de Cultura y Educación.

Fuentes García, Miguel,

2012 *Té elixir de vida* (Madrid)

Marcouin, Francis y Otomo, Keiko,

1990 *Quand le Japon S'ouvrit ou Monde* (París)

Rodríguez de Diego, Julia T.,

2013 Catálogo de la exposición *En Busca del Sol Naciente. Las Embajadas Tenshou y Keichou*.

参考史料

Amati, Scipione,

1615 *Historia del Regno di Voxu del Giapone, dell'Antichita, Nobilita, e Valore del suo Re Idade Masamune, delli Favori c'a Fatti alla Christianita, e Desiderio che Tiene d'Esser Christiano, e dell'Aumento de Nostra Santa Fede in Quelle Patri. E dell'Ambasciata che ha Inviata alla Santita di N.S. Papa Paolo V e delli Suoi Successi, con Altre Varie Cose di Edificatione, e Gusto Spirituale de i Lettori*.

1585 *Carta de Cristóbal de Salazar, embajador en funciones en Venecia, a Felipe II, informándole de la recepción de la embajada y las celebraciones hechas en su honor*. AGS, EST-LEG, 1341,34.

1585 *Carta del secretario del embajador en Roma, Hernando de Torres, al embajador en Venecia, Cristóbal de Salazar*. AGS, EST-LEG, 1535,74.

Frois, Luis,

1592 *Tratado dos Embaixadores Japoos que Forao de Japao a Roma no anno 1582*.

1657 “Itinerario de la Misión Sowa por el Sureste Hispano” en *Historia do Japao*.

Guzmán, Luis de, S.I,

1891 *Historia de las Misiones de la Compañía de Jesús en la India Oriental, en la China y en Japón, desde 1540 hasta 1600*.

1615 *Relations du Mme. De Saint Trophez*.

ホルヘ ガルシア アロヨ

Jorge Garcia Arroyo

スペイン マドリッド州生まれ。鹿児島市在住。マドリッド・コンプルテンセ大学修士課程修了。

²⁵ Colomar Albajar, Maria Antonia y Lázaro de la Escosura, Pilar, Catálogo de la exposición *De Japón a Roma Buscando el Sol de la Cristiandad. La Embajada de Hasekura*. *Archivo General de Indias*. (Sevilla), 2013, P5)

²⁶ Note 2と同じ (P15)

島嶼におけるエコツーリズムの特徴と在り方

—その成立過程に着目して—

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 島嶼政策コース1年
宋 多情

I. はじめに

日本における初めてのエコツアー事例は、1988年小笠原諸島母島でのホエールウォッチングである。小笠原村商工会がむらおこし事業として先進地であるハワイを視察したのがきっかけになった。翌年には、研究者と連携する小笠原ホエールウォッチング協会が設立された。このように、日本のエコツーリズムは島嶼から民間により始まったものであるが、本格的に取り入れられるようになったのは、90年代に入ってからであり、環境庁（当時）を中心とした国の政策に主導された。

環境省によると、1991年に環境庁が開始した「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」が推進に向けた取り組みの始まりであるという。そして、1993年の屋久島と白神山地の世界自然遺産登録は、全国的にエコツーリズムへの関心を寄せるきっかけとなった。

本研究では、エコツーリズムの担い手に焦点を当てて、日本の島嶼地域におけるエコツーリズムがどのように展開されるのかを明らかにする。いくつかの島嶼地域の事例を取り上げ、主体によって異なる発展パターンの図式化を行う。

II. エコツーリズムとは

日本では、環境庁の「熱帯地域生態系保全に関する取組について」（1990）にて、熱帯林生態系を保護するためにエコツーリズムが提唱された〔真板2001：39〕。1993年には、日本旅行業協会（JATA）

が「地球にやさしい旅人宣言」を制定し、環境と文化の保護を呼びかけた。日本自然保護協会（NACS-J）は、「エコツーリズムガイドライン」（1994）を発行し、エコツーリズムを「生物多様性保全を基本とした社会的なしくみ」として提案した¹。そして、エコツーリズムの普及、観光による地域振興と環境・文化への社会的貢献を目的に設立されたエコツーリズム推進協議会（JES）²は1999年、海外の先例と共に基本になる概念を紹介する『エコツーリズムの世紀へ』を出版し、エコツーリズムの入門書として役割を果たした。

それでは、上記4つの立場による定義からそれぞれの特徴を明らかにした上で、本稿で用いるエコツーリズムとは何かを考えてみる。

1. 4つの定義

環境省は、エコツーリズム推進会議において、エコツーリズムの概念を「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた」と述べている。エコツーリズム推進法では、「自然環境の保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育の場としての活用」を基本理念として定めた³。

日本旅行業協会は、以下の6つの要素のうちどれか一つを含む自然観察が主体のツアーで、なおかつ環境への悪影響を最小に押さえる努力と訪問先への経済

1 日本自然保護協会—活動の概要（<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism/>）

2 （現）日本エコツーリズム協会。1998年に発足し、2003年には内閣府より認可を得てNPO法人になった。
日本エコツーリズム協会—JESについて（<http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/jes/>）

3 環境省—エコツーリズムとは（<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/about/index.html>）

的・社会的貢献があれば、エコツアーであると述べている。

①旅行者の教育、②絶滅に瀕した動植物の保護、③文化・歴史的環境保全への貢献、④専門ガイドの利用、⑤地元社会の利益、⑥ゴミの削減と最小限のインパクト⁴

日本自然保護協会は、エコツーリズムを「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」⁵として定義している。

日本エコツーリズム協会の定義をまとめると、自然・歴史・文化など地域固有の資源を、適切な管理に基づく保護・保全を図ることで資源は健全に存続される。これは、旅行者の資源へのふれあいの機会を永続的に提供し、地域経済への波及効果に繋がる。即ち、資源の保護と観光業の成立、地域振興の融合を目指す観光の考え方によって、地域の暮らしは安定し、資源が守られていくことを目的にしている⁶。

2. エコツーリズムの要件

1) エコツアーの対象

まず、エコツアーの対象についてみてみよう。環境省の場合、自然環境や歴史文化を対象にしていることが分かる。日本旅行業協会は自然観察が中心であるが、文化や歴史的環境の保全についても言及している。日本自然保護協会でも、同じく、地域の自然と文化をその対象にしている。最後に、日本エコツーリズム協会では、自然と歴史、文化を地域固有の資源に位置づけていることが確認できる。4つの定義から、エコツアーに利用される資源は「自然（環境）」「歴史」「文化」であることが明らかになった。しかし、実際のエコツアーでは、やはり自然の方が主要素になる。その地域の身近な歴史と文化を中心にする里地里山エコツーリズムも存在するが、本稿においては、主

に自然を扱うエコツアーを研究対象にする。

2) 何を重視するのか

エコツーリズムにおいて何に重点をおいているのか。4つの定義からは大きく「自然の保護・保全」「ガイドの存在」「地域社会への貢献」の3点を取り上げることができると思われる。このうち最も重視されているのは「自然の保護・保全」であり、環境省は、観光客が地域固有のそのものの大切さ、価値を理解することで保全に繋がるという。そこには、住民自らの地域資源の価値に対する再認識が必要になる。

ガイドについて、日本エコツーリズム協会は、地域・自然・文化と旅行者の仲介者（インタープリテーションの能力を持ったガイド）が存在することが望ましいと述べている。日本自然保護協会の定義には、ガイドはツアーオペレーターであり、環境倫理を身につけたガイドになることを求めている。自然と地域文化を理解した上での解説、自然へのローインパクトの実現と地域文化との摩擦を防ぐための指導などがガイドの役割として与えられている。日本旅行業協会では、エコツアーの成立に必要な要素に「専門ガイドの利用」という項目があり、「特別に訓練された添乗員、現地ガイド」「自然及び地域文化のインタープリテーション」「地域住民との対話のある案内」と具体的な条件がなされている。

環境省は、上記の定義ではガイドについて述べていないが、ガイドの連携や質を上げるための制度化などの取り組みを行っている。

地域社会への貢献には、いわゆる「観光による地域振興」という名で語れる広い意味での貢献と、事実的な地域経済への還元を求める貢献があると思われる。表現の違いに過ぎないとも言えるが、後者の経済的還元を定義に示しているのは、日本旅行業協会（地元社会の利益）、日本自然保護協会（地域経済に貢献）、日本エコツーリズム協会（地域経済への波及効果）である。日本旅行業協会の利益に関する要素には、「地元製品・サービスの利用」「商品企画、手配における連携協力」「地域社会への金銭的その他の寄付」をその例として取り上げている。しかし、地域への還元というものは、形として現われにくいものであり、特に金

4 日本旅行業協会—エコツアーとは？（<https://www.jata-net.or.jp/travel/info/eco/5.html>）

5 日本自然保護協会—資料集その4 エコツーリズムの定義（<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism/1994/08/4.html>）

6 日本エコツーリズム協会—エコツーリズムとは（<http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/>）

銭面においては問題を生むことになる。そこには、本稿の後半で論じる‘担い手’が重要なキーワードになる。即ち、エコツアーを行うのは‘ガイド’であり、ガイドが客を自然に案内するという行為は、基本的に職業としての仕事になる（ボランティアガイドや兼業で行う場合もあるが、後ほど詳しく説明する）。そこで生じる彼らの収益がそもそも還元できる対象なのか、また、どのような形で地域の経済に還元するかは難しい問題になるのである。

上記を踏まえ、本稿でのエコツーリズムを定義する。冒頭で述べたように担い手に焦点を当てた研究なので、最小限の要件が成立すればエコツーリズムと見なすことにする。エコツアーは、エコツーリズムの考え方を実践するためのツアーであり、ここでは「陸域と海域両方の‘自然’を主な観光資源に、インタープリターであるガイドが案内する、適切な人数で行われるツアー形式」に定義したい。

Ⅲ. 島嶼におけるエコツーリズムの展開

1. エコツーリズム導入の仕方

上で述べたように、日本におけるエコツーリズムは、環境庁を中心とした‘行政からの動き’で広まるようになった。即ち、島嶼のみならず大半の地域は行政によって導入されたエコツーリズムになる。一方、行政以外の担い手（企業）が活動を始めたエコツーリズム地域も存在する。あえて名前を付けると、行政関与型と営利企業型といったところである。しかし、後者の方式でエコツーリズムが展開されたとしても、行政が取り組み始めることによって、そのほとんどが行政関与型に変わって行くのである。但し、地域によって行政の関与方式は異なる。

2. エコツーリズムの担い手

エコツーリズムの担い手は誰なのか。エコツアーを実施する「ガイド」の事業形態から見ると、大きく兼業、専業、NPOに分けられる。兼業ガイドは、本業のほかにツアーガイドを仕事として兼ねている場合をいう。専業ガイドとは、ガイドの仕事のみを職とし

て持つものである。NPOは、非営利団体であるため、構成員に対して収益を分配することを目的としていない。従って、観光の振興を図る活動を行うNPOにおけるガイドは‘ボランティアガイド’になる。

ここで、行政関与型への変容における行政による指導と支援という要素を入れて考えてみる。

兼業と専業は、観光業を行う‘企業’になるので、関与と言っても、業界団体（エコツーリズム推進協議会や連絡協議会など）を作る程度の関与しかできない。即ち、エコツアーの実施に際して、ガイド内容の質を上げることや安全面の部分を管理するなどの行政による指導になる。

行政による支援の代表的な例としては、NPOを取り上げることができる。NPO法人は、行政が認証及び監督する権利を持っており、活動においては自治体が補助金や委託事業などの支援を行う。但し、NPOの中には、設立から行政が携わる場合もある。エコツーリズムを地域に取り入れようとした時に、担い手となる人物の不在やその他の環境に不十分な面があると、行政が中心となって地域住民を集めNPOを立ち上げるのである。また、NPOの設立さえ難しい時には、行政が全面的に組織の立ち上げから管理まで行う行政主導組織によって担い手を育成・確保する。その後、担い手がある程度安定するとNPOになる場合もある。このようにNPOでも行政による支援の度合いが異なるので、行政が支援することで同じように展開されるわけではない。

以上、兼業・専業とNPOは、前者が企業であり、後者が設立において必然的に行政との関係性が生まれるという特徴があるが、両者の最も大きな差異は行政支援の質が違うということである。企業には、設備資金や雇用補助など経営に対する支援を行う。つまり、企業として自立するといつでも打ち切ることができる単発的支援である。NPOには直接的支援として事業に対する補助金を出すことができる。NPOは寄付金のみでは運営が難しく、持続的に支援を受けるという特徴がある。

3. 事例研究

1) 屋久島

屋久杉の伐採は江戸時代に本格的に始まり、高度経済成長期である1960年代まで大規模に行われた。1970年代に入ってから、国有林に対する国の方針が自然保護に重点を置かれるようになり、森林の利用（林業）にも変化が生じた〔金高 他2011：68〕。屋久島においては、ヤクスギランドと白谷雲水峡が屋久島自然休養林（1974）に指定された〔吉良 他1998：33〕。

かつて林業が盛んだった時期、屋久島営林署の職員たちは、島外の人⁷が多かった。屋久島における初期のガイド業というのは、そのまま屋久島に定住した森林に詳しい林業関係者たちが山に案内するものであった。1989年には、島外出身者で構成された屋久島初のガイド組織「屋久島ガイド協会」が立ち上げられた〔瀬戸口 他2004：603〕。当時は、大型バスで主な観光スポットを巡るいわゆるマスツーリズムが人気であり、団体客を対応するために今まで個人で活動していたガイドたちが集まるようになったのである〔中島2010：253-254〕〔瀬戸口 他2004：603〕。

1993年の世界自然遺産登録は、屋久島に大きな影響を及ぼした。客の増加と共に、ガイドの需要も伸びてきて、島民もガイド業に目を向けるようになった。いろんな職業を持った島民が兼業としてガイド業を行う場合が多かった。

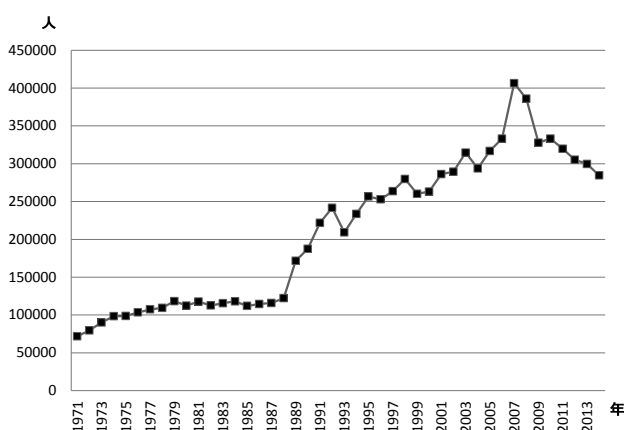


図1 屋久島の入込客数

（種子屋久観光連絡協議会作成資料「屋久島年度別入込客数」より作成）

7 熊本営林局が九州全域を管轄しており、熊本と宮崎から多くの人が作業員として来ていた。人手が足りない時には島民を雇用していたが、ほとんどが島外者であった。

客が多くなることで、エコツアーを専門にする専門ガイドも現れた。より多くの島外者が屋久島のガイド業に携わるようになったのである。客は兼業ガイドより大卒で島外出身の「専門」ガイドを好み、兼業は徐々に駆逐され、ガイドを辞めていったのである。一時300人ほどのガイドが活動していたが、現在は約100人がガイド業を行っているという〔萩野2011：43〕。ガイドに関する更なる展開としては、まだ活動を続けている少数の兼業ガイドたちが、彼らの子どもを大学に行かせて専門ガイドにさせるという世代交代が進んでいるという。このように、屋久島におけるガイドの専門化は、約20年かけて行われてきたのである。

2) 小笠原諸島

小笠原諸島におけるエコツーリズムは、冒頭で述べたようにホエールウォッチングから始まった。90年代半ばまでは観光船が少なく、漁船でホエールウォッチングを行っていた⁸。ドルフィンスイムもこの時期に現われ、漁師の兼業化が進むようになった。ドルフィンスイムは、ホエールウォッチングに比べ技術的に容易であるため、兼業でもやりやすく、小笠原ではほぼ漁師が兼業で携わっている状況である。一方、兼業ガイドとの競争が避けられなくなった専門の人々は、山のガイドや野鳥観察、ナイトツアーなどその他の領域まで活動を広げすみわけをしている。

現在、小笠原観光協会に登録されているツアーガイド

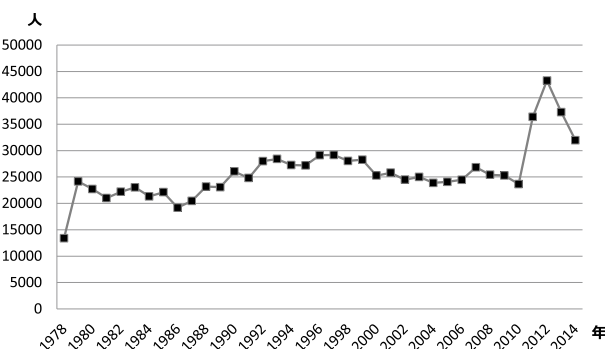


図2 小笠原諸島父島の来島者数

（小笠原村観光協会「平成26年度統計資料」より作成）

8 財団法人日本交通公社 2005『平成16年度 小笠原地域エコツーリズム推進モデル事業 実施報告書』p27-30

9 70件のうち、レンタカーとクラフト体験などその他9件を除いたもの。小笠原観光協会「ツアーガイド一覧」(<http://www.ogasawaramura.com/play/>)

ドの一覧を見ると、61社（もしくは個人ガイド）が登録されている⁹。ドルフィンスイムを行っているのは、25社であり、ダイビングショップ2社以外はホエールウォッチングも一緒に行っている。この23社の中では6社が森・山のガイドも兼ねている。

人口約2500人の小さい島で、東京から船で25時間掛かるというアクセス上の制約を持つ小笠原は、屋久島に比べるとエコツーリズム市場の規模は小さく、その分、客も多くはない。それにもかかわらず、この人数のガイド業者がいられるのは、兼業だからこそ成り立つことであると思われる。

3) 佐渡ヶ島

佐渡はジオパークの認定において、行政が担い手になってガイドの組織化まで行ったケースである。ジオパークは、科学的に重要な地質や地形を見どころにする一種の公園である¹⁰。ジオツーリズムについて、河本（2011）は「地球科学的（地学的）資源を主たる対象とするエコツーリズム」であると定義している〔河本2011：776〕。よって、本稿ではジオツーリズムの中核拠点になるジオパークも広い範囲でのエコツーリズムとして捉えたい。

佐渡のジオパークに向けた取り組みは、2010年から始まった。佐渡市教育委員会がジオパーク準備室になり、ガイド育成に関する事業を始めた。佐渡の地質に関することを主な内容にした「ジオパーク市民講座」は、約半年間10回の講義と実習、野外巡検を行った。翌年には「佐渡ジオパーク推進協議会」が設立され、教育委員会はジオパーク推進室として市民講座を続けた。2012年には、新たに初級コースを設け、従来の講座はガイドを目指す人々向けにした。同年の12月からは、中級コース修了生を対象にガイド養成講座を始め、21名がジオガイドになった〔市橋2013：84〕。佐渡は2013年9月に日本ジオパークに認定され、ツアーの実施やシンポジウムの開催、ガイド研修会での新しいコース作りなど、世界ジオパークを目指し、様々な

活動を行っている¹¹。

IV. 考察

1. エコツーリズムの発展パターン

エコツーリズムは、以下の図1のように大きく3つのパターンで展開される。

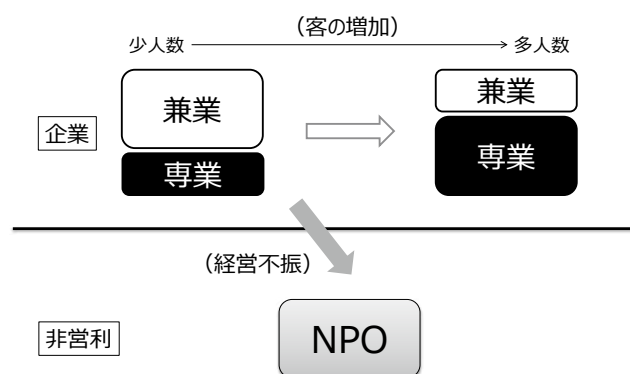


図3 エコツーリズムの担い手と発展パターン

1) 兼業から専業へ

ある地域でエコツーリズムが新しい産業として現われるとしたら、大半は小規模の兼業ガイドとして事業を始めることになる。客が増加することで市場の規模は大きくなり、専業ガイドができあがる。兼業から専業へ展開されるのは、企業としての自立を意味する。屋久島がこのパターンに当てはまる。上記の事例から分かるように、世界自然遺産登録の影響で客が急増し、島外の専業ガイド数も増え続けた。兼業ガイドは利用者のニーズに答えられずに自然に衰退していった。今も少数の兼業ガイドは存在するが、彼ら自身の子どもに専門知識を身に付けさせ、専業ガイドにするという新たな展開も生じている。

屋久島のエコツーリズムは、島嶼のみならず日本国内において最も成功した事例になる。また、その始まりが島外出身の林業関係者という特殊性もあり、他の地域に比べるとガイドの外部化が強い特徴もある。

2) 兼業と専業のすみわけ

エコツーリズムの展開において、兼業と専業のすみわけが顕著に表れている事例には、小笠原諸島を取り上げることができる。ホエールウォッチングだけでは

10 1997年ユネスコ総会で提案されたユネスコジオパーク計画から世界ジオパークネットワーク（GGN）が推進を行っている。日本には日本ジオパークネットワーク（JGN）がある。各加盟に認められた地域がジオパークになる〔渡辺2014：5〕。

11 佐渡ジオパーク—ジオニュース（<http://sado-geopark.com/news/index/index.html>）

成り立つのが難しかった専門のガイドたちはドルフィンスイムを始めたが、漁師たちも次々とドルフィンスイムに携わるようになった。そこで更なる展開として、専門ガイドが陸域の方までガイドの案内範囲を広げた。このように、提供するサービスが異なると、兼業と専門のすみわけで競争を回避しつつある程度の共存を保つことができる。

3) NPO化

エコツーリズムの展開によってNPO化が進む場合もある。NPO法人になると、国や地方自治体からの補助金や企業などの助成金で資金を確保することが可能になる。運営資金が十分であると、エコツアーの実施による収益の一部がボランティアガイドの活動費として与えられるようになる。本来、NPOは構成員に利益分配をしない組織であるが、ツアーを実施するためにガイドが負担する活動費を還元することなので問題はない。

NPO化には3つのケースがあると思われる。兼業として行っていたガイド業がうまくいかなかった場合、行政からの支援を受けてNPOになる。同じように、専門でも経営不振によりNPO化する場合がある。そして、最初から行政が関与してNPOを立ち上げるケースもよくある。中には、NPOにもなれない地域があり、行政はエコツーリズムを推進するために、積極的にガイドの育成に関する事業から組織化まで携わる。佐渡のジオパークは、持続的な人材育成に関する取り組みを通して、今後NPO化する余地が十分あると思われる。

島嶼に限らず日本におけるジオパークは大半がこのようなNPOまたはNPOになる以前の段階である行政主導組織を担い手にした展開を見せている。

V. おわりに

本稿では、エコツーリズムがある地域で展開される時に、担い手によってその特徴と発展の仕方がどう異なるのかをいくつかの事例から検討してきた。まず、導入において行政が関与したのか、その地域で自然に現われたのかによって分類すると、ほとんどが行政に

よるものであり、そうじゃない場合でも展開されるに従って行政の関与が生じた。この点については、島嶼のみならず全体的に共通する議論だと思われる。

エコツーリズムの成立に重要な役割を果たすガイドという担い手は、事業形態によって兼業・専門とNPOに分けられ、行政による指導と支援を受けるようになる。両者における最も大きな違いは、支援の質である。

また、エコツーリズムが展開するにつれて、ガイド業は兼業から専門へ発展するか、兼業とすみわけをするか、もしくはNPO化に進む。中には、行政による最大の支援を受けNPOの前段階になる組織が作られる場合もある。

このように、本研究では、エコツーリズムの展開の類型化を試みた。しかし、この分類がすべての地域のエコツーリズムに適用されるのかは、より多くの事例研究から検証する必要がある。

筆者の主な研究フィールドである奄美大島の事例だけでも、上記の島々とは異なる展開がみられることが分かる。屋久島は世界自然遺産登録による客の増加が兼業から専門へ導いたが、奄美大島では、2003年世界自然遺産候補地になる前の90年代半ばには、すでにガイドを専門にする地元出身の人が何人か存在していた。そのうちの一つは現在、奄美大島のガイド業においては最も大きい会社として位置付けられている。このように、奄美大島は先に専門ができあがり、後から兼業業者が現れた形で、今は兼業ガイドと専門ガイドがすみわけしている状況である。

専門でガイド業を始めた理由は何なのか、どうして専門が成立したのか。このように理論などで解けない、エコツーリズムを実施する人たちの‘意識’という部分に迫ることを今後の更なる展開として、本研究で設けた枠組みに基づいて人類学的考え方をうたいたい。

また、本研究では島嶼に注目して議論を行ってきたが、それが島嶼ならではの特征として捉えられるものなのか、もしくは、島嶼以外のエコツーリズムにおいても一般的に言えるものなのかについては深く論じられなかった。今後は島嶼に限らず、幅広い事例研究を行うことにしたい。

参考文献

市橋弥生

2013「佐渡のジオパーク～これまでの歩み～」『形の科学会誌』28(1)：84-85 形の科学会

エコツアーリズム推進協議会

1999『エコツアーリズムの世紀へ』エコツアーリズム推進協議会

金高文香、フンク カロリン

2011「屋久島における観光産業の発展とその空間的特徴」『環境科学研究』6：65-82 広島大学大学院総合科学研究科

河本大地

2011「ジオツアーリズムと地理学発「地域多様性」概念—「ジオ」の視点を持続的地域社会づくりに生かすために—」120(5)：775-785 地學雑誌

瀬戸口真朗、下村彰男、伊藤 弘 [他]、小野良平、熊谷洋一

2004「屋久島におけるエコツアーガイドの動態とその背景に関する研究」『ランドスケープ研究』67(5)：601-604 社団法人日本造園学会

中島成久

2010『屋久島の環境民俗学—森の開発と神々の闘争』明石書店

萩野 誠

2011「屋久島縄文杉ルート of 現状と観光としてのエコツアー」『経済学論集』(76)：41-56 鹿児島大学

真板昭夫

2001「エコツアーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」『国立民族学博物館調査報告』23：15-40 国立民族学博物館

吉良今朝芳、枚田邦宏、馬場裕典

1998「屋久島における森林利用(I)：屋久スギの管理と利用の変遷」『鹿児島大学農学部学術報告』48：31-39 鹿児島大学

渡辺真人

2014「ジオパークの現状と課題」『E-journal GEO』9(1)：4-12 日本地理学会

財団法人日本交通公社

2005『平成16年度 小笠原地域エコツアーリズム推進モデル事業 実施報告書』p27-30

参考資料等

種子屋久観光連絡協議会作成資料

「屋久島年度別入込客数」

小笠原村観光協会

「平成26年度統計資料」

日本自然保護協会

・活動の概要

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism/>

・資料集その4 エコツアーリズムの定義

<http://www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism/1994/08/4.html>

日本エコツアーリズム協会

・JESについて

<http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/jes/>

・エコツアーリズムとは

<http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/>

環境省

・エコツアーリズムとは

<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/about/index.html>

日本旅行業協会

・エコツアーとは？

<https://www.jata-net.or.jp/travel/info/eco/5.html>

小笠原観光協会

・ツアーガイド一覧

<http://www.ogasawaramura.com/play/>

佐渡ジオパーク

・ジオニュース

<http://sado-geopark.com/news/index/index.html>

ソン
宋 多情

韓国全州市生まれ。鹿児島市在住。鹿児島大学大学院人文社会科学科人間環境文化論専攻修了。

戦後日本の地方政治における理念と内実

—奄美における保徳戦争を事例に—

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース 2年
寿 洋一郎

はじめに

1980年代初頭から1990年代にかけて、全国唯一の小選挙区であった奄美群島において、現職でロッキード事件の田中角栄弁護人であった保岡興治氏と、これに挑む日本医療革命の旗手徳田虎雄氏（以下敬称略）との、いずれも全国的に名の通った若手同士で、出身者も含め奄美群島民全体を巻き込んだ激しい選挙戦が繰り広げられた。いわゆる“保徳戦争”である。この選挙の諸々の報道や論評ではその負の側面（カネ、混乱、特殊な選挙）が強調されたが、それらはおもに選挙の内側、つまり、奄美群島内における選挙の実態を描くものであった。他方、どのような歴史的・社会的・経済的・政治的背景のもとで生じた現象だったのかという外側からのアプローチは乏しく、十分な検証がなされていない。“保徳戦争”はあくまで特異な事象に過ぎず、その前後の選挙とは全く無縁で突発的に起こったものだったのか否か。本報告は“保徳戦争”に至った歴史的背景を明らかにすることで、“保徳戦争”が奄美大島にとってどのような意味をもつのか、なぜ起こらざるを得なかったのか、“保徳戦争”を生んだ奄美特有の政治的特徴とは何かという、私に与えられた大きなテーマを解明するための序説としたい。はたして、選挙の「内」（実態）と「外」（外的環境）には、どのような差異がみられるのだろうか。

1. 奄美群島選挙の5つの時期区分

以下では、1954（昭和29）年に行われた奄美群島の日本復帰に伴う特別選挙から、1990（平成2）年の第

39回選挙までの36年間にわたって行われた衆議院選挙を検討する¹。この間に15回（初回は当選者なしで再選挙となったのでそれを数えると16回）の選挙が行われた。ここでは、5つの時期、①復帰直後、②保岡・伊東交互当選期、③転換期、④保岡一強期、⑤保徳戦争期に区分して、その時代ごとの特徴を整理する。その上で、奄美大島がおかれた社会状況や地理的環境、国政との関わりに注目しながら、その時代ごとの文脈の中で特徴もしくは特筆事項を明らかにしたい。

2. 復帰直後²

復帰直後の独自選挙とその再選挙を第一期と位置付ける。復帰後の第1回衆院選は1954（昭和29）年2月25日に行われた。奄美にとってこの選挙は、1942（昭和17）年の総選挙（翼賛選挙）以来13年ぶりであり、しかもかつては鹿児島第3区（議員定数3、肝属郡・奄美全域）として行われたのとは異なり、「奄美群島特別区」（議員定数1人）として行われた。選挙区は「奄美群島の復帰に伴う法令の適用の暫定的措置等に関する法律」（1953年11月16日公布）に基づき、一人一区の典型的な小選挙区制が採用された。保守系、革新系から立候補者8名が出たが、当時の法定得票数2万2640票に満たず、再選挙となった。再選挙では前回出馬した無所属の西田当元、金井正夫、山元亀次郎の3名が退き、残りの5人が一議席を争った。5人は共

1 本稿で扱う戦後の奄美群島特別区の衆院選挙結果（当選者、候補者、年齢、党派、出身島、得票数、得票率など）は、大島支庁総務課による「奄美群島区衆議院選挙結果調べ」（県立奄美分館所蔵）や1954（昭和29）年2月15日から同55年6月22日までの「南海日日新聞」（以下文章毎に日付は示す）を参照した。

2 占領下の奄美及び復帰運動については村山家国著『奄美復帰史』（南海日日新聞社）を参照した。

に復帰運動で最前線に立ち闘ってきた名士ばかりで、ことに泉芳朗（日本社会党）は復帰運動の象徴のような存在であった。結果は、再選挙で泉は4位に終わり、元鹿児島県副知事であり、保岡興治の父でもある保岡武久（自由党公認）が当選した。

ここで注目すべきは、復帰運動の立役者・泉芳朗³の落選である。泉は復帰運動のシンボルであった。泉は圧倒的な知名度を持っていたはずである。なぜ泉は落選したのか。それは当時の奄美がおかれていた状況とそこでの住民意識に規定されていた。奄美群島は、1953（昭和28）年の本土復帰までは米軍の信託統治下にあり、そのため、戦後の復興が大いに遅れた。当時の奄美では言論、集会、結社など、基本的人権の自由と民主化の要求が抑圧され、本土との自由な往来も制限された。たとえば、米軍施政下における奄美の惨状について、喜山荘一は、「県の知事・重成格は、総理大臣吉田茂に『奄美大島の荒廃はひどく、窮乏をきわめているので、これを受け入れる場合、全額国庫負担の特別立法措置は必要と思う』（『南海日日新聞』）」[喜山2009：206]と、復帰直前の8月に述べていたのである。ここに当時の悲惨な状況がうかがえる。本土との経済格差、環境整備の遅れなどが目立った奄美群島であったが、この時期に行われた選挙では、住民自治による復興を求める泉よりも、中央と強いパイプをもつ保岡への期待が勝ったといえる。

当選した新人・保岡武久は元内務省の高級官僚であり、まさに、そうした要求に対応しうる経歴の持ち主であった。宇検村出身で東大法学部を卒業し、大阪府警刑事課長、奈良県内務部長、鹿児島県副知事まで務め、1951（昭和26）年の鹿児島県知事選挙では重成格と知事の座を争った。知事選に出たおかげで知名度は高くなっていて、この衆議院議員選挙でも有利に働いた。代議士当選後は、内閣官房副長官、郵政政務次官などを歴任している。

当時、奄美の人々が、候補者に中央とのつながりの強さを求めたことを傍証する当事者の回想を、2003（平成15）年1月8日付の読売新聞「奄美50年」から引用しておこう。泉が名瀬市長だった時代に秘書を務

めていた楠田豊春氏の回想である。楠田によれば、当時の奄美は「米軍統治下で、貧しく、苦しい生活を強いられてきた群島民にとって、復興のためにはどうしても国、県の援助が必要だった」。泉は選挙戦の中で、国、県の補助に頼るだけでなく、群島民が必要とする事業を群島民自らが計画、実行する自主性こそが求められていると主張した。こうした主張を掲げて保岡ら保守系の候補に挑んだが、圧倒的な支持を得るまでには至らなかった。「（泉が）国、県の援助をすべて否定していたわけではないのですが、群島民の多くが実績のある政治家、それも与党に身を置く国会議員の誕生を望んでいたということでしょう」と楠田は述べている。地元では、復帰後初の国政選挙で決定づけられたこの〈流れ〉、すなわち中央とのパイプの太さが選挙を左右する構造が今に脈々と受け継がれている、と指摘する声も少なくない。以上のことから、復帰後のこれらの選挙は、窮乏を打開するために、強い中央志向が民意として表れたものと位置付けられる。

3. 保岡・伊東交互当選期

二人の有力保守政治家である保岡と伊東隆治（龍郷町出身、東大法卒、外務官僚、元参議院議員）が当落を繰り返した時期で、後の保徳戦争と対比される一連の選挙でもある。継続は力で、国会議員は連続した当選回数がある世界で、「こんなに交互当選を繰り返しては奄美のためにならない」と嘆かれた時期でもある。

復帰後初の選挙と再選挙は奄美群島区単独で実施されたが、1979（昭和54）年の第27回総選挙からは全国の総選挙に組み込まれた。ただし、選挙区は奄美群島区として1選挙区1人の小選挙区制のままであった。1955（昭和30）年から1968（昭和43）年の時期に行われた計6回の選挙で、伊東と保岡が3回ずつ当選している。2人とも自民党に所属していたので、両者の対決はイデオロギー的な対立によるものではなかった。ここで興味深いのは、伊東も保岡も結局、絶対的、安定的な地盤を築くことに失敗したということである。後の保岡興治が一時、他を寄せ付けない絶対的な強さを見せ、強固な地盤を築いたのとは対照的である。そ

3 泉芳朗については水野修著『炎の航跡：奄美復帰の父・泉芳朗の半生』（潮風出版社）を参照した。

れは何故か。その要因の一つとして、当時の奄美が置かれていた経済的社会的状況、とくに交通事情に注目したい。

第27回の選挙では、民主党公認の伊東隆治が現職の保岡に圧倒的投票差で当選した。その後、第28回、29回は保岡、第30回、31回は伊東が当選し、31回の任期途中で伊東が急逝するまでこの状況が続いた。後の新聞記事にはこうした状況を表して「一期交替のジंकス」⁴、「「現職落選」のジंकス」⁵という表現が見られる。

この1955（昭和30）年～1967（昭和42）年ごろは日本の高度経済成長期と合致するが、奄美群島ではその恩恵を同時代的に享受することはできなかった。交通事情の点から見れば、奄美大島で空港の供用が始まったのは1964（昭和39）年のことであり、それまでは長時間かけて船で本土とを行き来するしかなかった。

二人のシーソーゲームまがいの長期間の争いについて、地元民は次のように理解し、それが通説として通っていた。「（飛行機もない時代故）東京から最短でも片道1～2日もかけての里帰りはままならないので、自ずと現職は島と疎遠になる。その間、浪人中の候補は、地元にはりついて、こまめに運動して歩いて島民の心をつかむから返り咲くことができるのだ」と。

たとえば、1960（昭和40）年頃までは、本土に出ている奄美の人たちは、親や兄弟などごく親しい肉親の死に目には会えなかった。よって年老いた親を置いて島から旅立つときは、それはさながら今生の別れと見なされ、港での見送り風景には何とも言えない寂寥感や悲哀が漂っていた。東京・大阪を例に取ると、汽車で鹿児島まで1日、鹿児島から島まで船旅で1日、最低2日を要するというのが相場であった。まして、悪天候や台風に見舞われれば、到着までに3日、4日を要するのはざらであった。このことは、国政を目指す候補者にも同様にふりかかっていた。

交通事情が悪いことの一つの証左として、現在では船を港に横付けするのはごく当たり前になっているが、奄美の中心地の名瀬港ですら、港に横付けできる

ようになったのは1957（昭和32）年のことである〔名瀬市誌編纂委員会1968：479〕。また、空路についていえば、前述のように奄美空港が開港したのは1964（昭和39）年である⁶が。本格的なジェット空港になったのは27年後の1991（平成3）年であった。

なお、昭和54年鹿児島県観光連盟の資料⁷によれば、東京-奄美大島間が飛行機で3時間弱であるのに対し、船は36時間、約12倍の所要時間である。以上のような交通事情の劣悪さは、それは即ち社会活動の非流動性を意味し、今日の交流盛んな人の流れとは格段に異なったわけである。

このことは選挙に勝つための日常的政治活動にかなりの影響を与えていた。よって、衆議院議員として立場上東京に張り付いて政治活動せざるを得ない現職は地元での日常的な活動は困難だった。他方、落選し無冠フリーとなった側にとっては、地元での活動に有利に働いた。地元には張り付いて捲土重来を目指し、まめに戸別訪問等を行っていた。これらの運動量の差異が後の選挙の勝敗に深く影響していたとみられる。

選挙手法も、今日であれば利便性の高い交通手段や伝播力の強い広報手段を駆使しつつ、土建、農協、病院などの組織をフルに活用したところの組織戦に比重がおかれ、候補者本人は要所要所で登場する方法が展開できるが、当時はまだ候補者本人主体、口コミ主体であり、同行して回る人も市町村長や同議員らに限定されていた。加えて、旧来の地縁ひいては血縁の要素が、より色濃く投票結果に影響したと見なされる。

通常、小選挙区は現職に有利と言われるが、必ずしもそうはならなかったのである。だからこそ、保岡と伊東の交互選出という状況が生まれたのではないだろうか。

4. 転換期

戦後奄美を牽引して、10年以上相争ってきた一方の

6 鹿児島県のHPによれば、群島内の各空港の供用年は、喜界空港1959（昭和34）年、徳之島空港1962（昭和37）年、奄美空港1964（昭和39）年、沖永良部空港1969（昭和44）年、与論空港1976（昭和51）年である。保徳戦争時代に突入後では、徳之島はジェット機が離発着し、徳田虎雄に至っては自家用機を持ち込み、たった1日で全郡を回るというたいへんな機動力を発揮し、この時代からみれば“離れ業”を演じていたのである。

7 藤原南風著『新奄美史（下巻）』（奄美春秋社）の394頁を参照した。

4 南海日日新聞（昭和42年1月30日）参照

5 南海日日新聞（昭和51年12月6日）参照

雄伊東隆治が、1968（昭和43）年3月28日に糖尿病のため、入院先の東京大学医学部付属病院で息を引き取った。同年5月の選挙は伊東の死去に伴う補欠選挙であり、保岡（無所属）が返り咲いた。この時の自民党の公認候補は、交互にはあるが長年公認を得てきた保岡ではなく、時の総理佐藤栄作派閥に連なる鹿児島県議会のベテラン議員笠井純一（喜界町出身、法政大卒、臨時北部政庁副知事、大島電力社長、琉大理事長）となり、やや意外感をもって受け取られた。保岡は時の政権派閥佐藤派と対立する池田勇人派閥に属していたために、公認が得られなかった。しかし、その保岡も翌年の69年選挙では、新人の豊永光（農林省OB、名瀬市出身）に敗れる。伊東に続いて保岡武久も政治の表舞台から消え去っていった。これをもって保岡・伊東の時代は終わった。

1972（昭和47）年の選挙で保岡の息子興治が当選するが、この時期はちょうど奄美選挙の転換期といえることができる。すなわち、伊東の死、保岡の高齢化により、世代交代の時代を迎えたという点、そして奄美群島における交通事情が大きく改善されたという点において、転換期とみなすことができるのである。

交通事情についてみれば、1960年代に与論島を除いた各島に空港ができた。船についても、毎日就航する「ニッパチ体制」が確立されてゆく。このことにより、たとえ現職であっても、足しげく奄美に通うことが可能になったのである。この件に関し、補欠選挙で返り咲いた保岡武久は「（選挙運動で）夜中に歩いたり、あらゆる交通手段を駆使して回ったので苦しかった。でも昔と比べると交通の便もかなりよくなって振興計画が進んでいることをハダで感じた」⁸と述べている。この転換期に登場してきたのが保岡興治であった。

さて、共通テーマ「差異」に立ち返って、ここでは、奄美群島区選挙における奄美大島本島内部の問題と、奄美大島と他の島々との関係について取り上げておきたい。本土で言えば地縁地盤の問題である。もっともこういう問題は、日常生活では渾然一体、どこに住もうが、どこの出身か関係なく、さほどのわだかまりもなく、交際交流は自由自在に行われているが、いざ選

挙となると対抗軸が探し出され、持ち込まれ、ことさら対立感情をあおりがちである。

この件、まず名瀬市出身の豊永光をみておこう。豊は前後5回出馬して、3回目にして漸く当選した。転換期に登場した豊永光の当選からは、奄美大島内の地域間競争という側面もうかがうことができる。豊は奄美群島のほぼ1/4の人口を占める名瀬市（現在の奄美市名瀬町）の出身である。名瀬市は郡都とも呼ばれる奄美群島の中心地であり、史上奄美衆議院議員選挙で一番多く候補を出しているのがここ名瀬市の10人で、内、戦前の基俊良、大島信と戦後の豊の3人が当選している⁹。この豊が出るまでは、戦後は一度も代議士を送り出しておらず、「久々に名瀬から国会議員を」のかけ声のもとに奮戦して一期ながら政治の表舞台に立つことができた。

この項次は、奄美大島と他の島々との関係についてである。上述したように、伊東の死去に伴う補欠選挙で、当落の有力な決め手となる自民党の公認候補として政権派閥佐藤派の推しで鹿児島県議の笠井純一が公認となった。もう少し付け加えると、鹿児島県政における当時からの実力者であった二階堂進や山中貞則など県選出自民党国会議員全員が推し、赤沢自治大臣などがわざわざ応援にかけつけ、当初は優位に運動を進めてはいたが、当選にこぎ着けるには至らなかった。

敗因としては、今までの実績、国会議員と県議員との格の差、学閥等が挙げられたが、なによりも笠井が群島内で最も人口規模の大きな奄美大島本島ではなく、2番の徳之島、3番の沖永良部島に次いで4番目の喜界島出身といった要素が当選を阻んだのではないかと見られた。同じ群島内といえども、どの島の出身かという違いによって、得票に影響を与える事例だと言える。当時の新聞にも「名瀬市の不人気 笠井氏に致命傷」¹⁰とある。ここで補欠選挙上位3人の名瀬市と喜界町の得票結果をみておこう。

	名瀬市	喜界町	全体	
保岡武久	7,640	654	29,404	当選

⁹ 奄美新聞社編『島興し通信』（17号、東京で発行）の奄美衆議院議員選挙百年史を参照した。

¹⁰ 南海日日新聞（昭和43年5月15日）参照

⁸ 南海日日新聞（昭和43年5月14日）参照

豊永 光	8,088	524	26,593	次点
笠井純一	2,964	5,803	24,167	

ちなみに戦後この奄美群島選挙区で当選してきた政治家の出身地（島）は、すべて奄美大島であった。奄美大島出身以外で立候補したのは、宗前清（沖永良部）、泉芳朗（徳之島）、西田当元（与論）、土岐直通（徳之島）、米倉文吉（徳之島）などがいたが、いずれも落選している。

5. 保岡興治一強時代

まず、保岡興治の生い立ちと経歴をみておこう。保岡の両親はともに奄美大島出身者であったが、内務官僚であった父親の仕事の関係で東京都千代田区に生まれた。その後、鹿児島市に移り住み、奄美大島では育ってない。よって学校も鹿児島大学附属小から東京麹町中学、日比谷高校、中央大学とエリートコースを進み、1964（昭和39）年に中央大学法学部を卒業する。同年10月、24歳で司法試験に合格して、1967（昭和42）年に判事補に任官され、鹿児島地方裁判所に裁判官として赴任するが、翌年に退官し、父親の選挙を手伝うようになった。島の人は保岡興治を「オキハルさんは島一番のサラブレッド」として親しみ、あがめ、羨望した。この間、仲人であった田中派の重鎮橋本登美三郎の秘書の肩書きを得た関係で、父の属した池田派ではなく田中派に所属し、中曽根派の豊永光へ挑戦の運びとなった。保岡は1976（昭和51）年にロッキード事件で田中角栄が逮捕されると、弁護士として田中弁護団の一員に加わった。

保岡は1972（昭和47）年に初当選を果たす。当選後は、父親の代まで続いてきた「現職は落ちる」というかつて嘆かれた現職の不利を払拭すべく、正に先代の二の舞を踏まぬよう、毎日曜日に選挙区に帰り、活発な行動を展開した。しかしまだこの時期には絶対的な強さを持っていたわけではない。保岡興治は二世議員であり、父である保岡武久の地盤を世襲したとはいえ、彼が他を寄せ付けない強さを見せるのは、当選3回目の1979（昭和54）年からであった¹¹。つまり議員に当選したのち、現職議員として地元奄美に影響力を

拡大することに成功したのである。交通事情の改善で現職であっても地元での活動が可能になったことで、かつてのような現職の不利は緩和されていったのである。

加えて、中央との関係でいえば、1970年代は田中派全盛時代であった。前述のように父の保岡武久は池田派に属していたが、息子の興治は最初から田中派に加わった。田中角栄はロッキード事件で退陣した後も、大平以降、中曽根、竹下の各内閣も田中支配下の政権と言われ、保岡興治もその配下で力をつけ、拡大していく構図が見える。このように保岡は田中派のバックアップを受けていたのである。「誰が出てもここ当分は保岡は倒せない」と誰しもがみなすほどの強さを誇った。保岡一強時代は、田中支配開始と符合する。

もっとも、対抗馬が共産党のみとなった頃から、次第に保岡興治は地元を留守がちにするように変わってきた。当時から他地域と比べると選挙への関心が高かった奄美群島においてすらシラケ選挙の様相を呈してきた。このことを示す当時の新聞記事の見出しを追ってみよう。まず第35回選挙当時の南海日日新聞（昭和54年9月25日）には、「これでいいか“シラケ選挙” 保岡候補は欠席」の大見出しのあと、「知名町の立会演説会 聴衆わずか41人」とあり、第36回選挙時の南海日日新聞（昭和55年6月7日）には、「盛り上がり欠く」の大見出しのもと、記事内容は「自民党の保岡オキハル候補（41）が本土の“同志”の運動で地元を留守にしていることもあって、フルに選挙カーが動いているのは共産党の島長国積候補の1台とあって静かなもの」と報じられていた。

6. 展望と課題

さて、交通事情の改善により現職としての不利を払拭し、また田中支配という中央政界のバックアップを受け、他の追随を許さない強さを誇った保岡興治の一強時代が、やがて脅かされ崩されようとする時代に入ってきた。なぜこのような事態に陥ったのだろうか

¹¹ 保岡興治が初当選した第33回の得票率は46%、続く第34回56.5%、第35回84.4%、第36回81.3%となっている。なお、第35回と第36回の対抗馬は共産党の島長氏のみである。

か。言い換えると、保岡一強時代に代わって、なぜ保徳戦争が始まったのだろうか。この問題こそ私自身が当大学院で取り組んでいる研究テーマであり、今後方向づけをしていくことになるが、現段階では仮説の域を出ないものの以下の点を挙げる可以考虑している。

第一に、田中金権政治への国民的批判の高まりが奄美政治にも影響が及んだ。巨悪で追求を受けている田中裁判に対し、国民側に立って追求こそして欲しいのに、逆にその法廷闘争で自分達の代表である保岡興治が前面に立って、得意然と弁護活動しているように映る。その姿を苦々しく感じる郡民も少なからず存在していて、この観点から「我々の代表にはふさわしくない、替えるべし」との声が上がる。これは当時の国民世論の政治腐敗打破、政治倫理の確立への声に呼応したものではあった。

第二に、「第一」と関連するが、徳田虎雄は「反角」を掲げ、都市部で成功した医療改革の手法を奄美の土建体質の体制打破に適用、政治改革と併せて医療改革、ひいては故郷奄美での病院建設の許可が下りるような政治環境を作りあげ、事業家的要素も加味した病院建設に資しようと意図した。

第三に、現職への反対勢力の雌伏、残存が挙げられる。政治家は政策の実行を掲げる一方、権力・利権の奪い合いに邁進する要素も強いが、これまでの奄美選挙において敵対した側、負け組、干された者、浮かべられない者の権力志向ないし奪回の意向は根強いものがある。奄美群島は、市町村政から国政まで政治学的には一元国家的状況を呈し、住民生活において行政政治の占める比重が他地域より高い。国会議員と縦系列でつながって重要な役割を担う市町村長選挙に至っては、公共事業の指名権と役所の人事権の奪い合いといった色彩が濃い。選挙運動こそ最重要な営業活動であり、就職活動であると極論する向きもあり、過熱選挙にもつながってゆく。

第四に、保岡の世襲、エスタブリッシュメント（支配者層）への反発及び奄美大島中心主義への潜在的な不満の存在である。二世議員、エスタブリッシュメントということは強みでもあると同時に、ねたみの対象にもなりえた。また戦後は、保岡父子をはじめ

め群島区から選出された政治家はすべて奄美大島出身であり、結果として奄美大島中心主義になっていた。この傾向に、「南三島からも国会議員を」という雰囲気作りが内々醸成され、徳之島をはじめとして他の島も含め対奄美大島意識が形成されたのではないか。出馬当初の徳田虎雄はそうした反体制・反大島意識を刺激するにはうってつけの人物であった。

第五として、シラケ選挙への嫌気と、選挙を“第四次産業”とみなす者たちの暗躍が挙げられる。

奄美群島は、既述のように10数年の長きにわたる保岡・伊東交互当選期、更には転換期においては一期毎に当選者が替わり、対立の構図に“慣れ”てきていた。そこでの選挙はシラケとは無縁で、郡民の関心が集まるのがいつものパターンであった。次に奄美で選挙が“第四次産業”と言われる所為だが、選挙があった方がお金は動いて儲かるのではないかと企図して無風状況を崩し、適当な候補者を探し出し選挙を仕立て、賭けの対象にしようとする者の存在である。選挙賭博は選挙戦が終わって警察が本格的に摘発に乗り出した頃に大々的に報じられているが、選挙に関わる側から見れば、選挙が予定されている以前から暗躍していると言える。賭博する者には、選挙ブローカーとか典型的なアウトロー的なものもいるが、建設業者のボスであったり、選挙に影響力のある“まともな”人物、或いはごく平凡な人もけっこう関わっている。といって喧伝されるほど、一連の選挙で彼らが主役にまで躍り出てくることはない。

第六として、押し寄せる開発構想の波への反対が徳田の運動とつながった。

当時奄美には巨大な石油精製基地、核燃料再処理工場など本土における迷惑施設の設置構想が次々持ち上がり、これらは自民党の後ろ盾である財界が推進している以上、自民党員である保岡興治も何らか関わっているのではと疑念をもたれ、それを阻止する運動の一環として、社会党の一部や社会運動家が徳田虎雄の行動と結びついた側面もある。

第七として、保徳戦争が激化した要因に双方の資金力の問題がある。さかのぼって1958（昭和33）年5月の選挙（3回目）に敗れた傷心の泉芳朗が妻喜美子に「金がなければ選挙には勝てぬ」と漏らしたと書かれ

ている¹²が、今度の挑戦者徳田虎雄には資金の調達力があつた。当初徳田虎雄も反角を名乗る以上クリーン選挙で出発したことは出発したが、出馬表明前に想定していたよりもはるかに強力な保岡の鉄壁の牙城の前で否応なしに戦術転換を迫られ、世上“目的のためには手段を選ばず”と評される現象の存在も強い否定できないような事態に突入していった。

この七つの要因が奄美群島区選挙の第五の時期、即ち「保徳戦争期」への変化を促したのではないか、という見通しのもと、今後研究を深め発展させていくことにする。

7. 結論

最後に、今回の共通テーマである「差異」と関連付けて奄美群島区選挙の推移を、外的環境の変化、実態に着目して整理をしてみた。金まみれ、混乱というイメージがある奄美選挙だが、「内」における激しい選挙戦に対し、それぞれの時代ごとに外部の諸条件が存在しかつ変化し、それが奄美選挙にも影響を与えた。

奄美選挙の「外」に目を向けることにより、選挙の変化の背景にあるものをいくらか明らかにできたと思う。外海離島奄美の経済基盤のもろさ、交通環境の変化や中央政界の動向が、奄美の選挙のあり様、あり方がある程度規定したということができよう。

参考文献

喜山荘一

2009『奄美自立論：四百年の失語を越えて』南方新社

名瀬市誌編纂委員会（編）

1968-1973『名瀬市誌』名瀬市

藤原南風

出版年『新奄美史（下巻）』奄美春秋社

水野修

1993『炎の航跡：奄美復帰の父・泉芳朗の半生』潮風出版社

村山家国

2006（1971）『奄美復帰史』南海日日新聞社

参考資料

大島支庁総務課

出版年不明「奄美群島区衆議院選挙結果調べ（復帰以後）」

奄美新聞社

1986-1988『島興し通信』17

南海日日新聞

1967（昭和42）年1月30日

1968（昭和43）年5月14日

1968（昭和43）年5月15日

1976（昭和51）年12月6日

1979（昭和54）年9月25日

1980（昭和55）年6月7日

読売新聞

2003（平成15）年1月8日

参考ホームページ

鹿児島県ホームページ（県内の空港）

<http://www.pref.kagoshima.jp/infra/port/kuko/>
（2016/2/1閲覧）

ことぶき よういちろう
寿 洋一郎

東京都世田谷区生まれ。鹿児島県天城町在住。鹿児島大学大学院人文社会科学研究科法学専攻修了。

12 水野修 前掲書 1993『炎の航跡：奄美復帰の父・泉芳朗の半生』潮風出版社

「プロジェクト研究発表に寄せて」

財部めぐみ
(ゲストコメンテーター)

プロジェクト研究は、鹿児島大学人文社会科学研究科の博士後期課程1年生が取り組まなければならない最初の大きな課題の一つです。このプロジェクト研究を通して、課題への取り組み方・調査や分析方法などを学べたことは、皆さんがこれから博士論文に取り組むうえできっと力になってくれることでしょう。またプロジェクト研究の特徴の一つでもある、他の学生と問題を共有化し、同じ課題に取り組むといったスタイルからは、仲間と協力することの大切さや、逆に、協同作業による研究の難しさなど、学生の今だからこそ味わえる貴重な体験にもなったはずです。

さて、今回はお二人の発表に対して、私なりに以下コメントをさせていただきたいと思います。まずは、ホルヘ・ガルシア・アロヨさんの発表について、日本初の公式外交使節である二つの使節団を取りあげ、主に絵画を通して日本人がどう描かれているかを分析されていました。和服と洋服を併用しキリスト教徒であることを主張しようとした使節団と、そうした日本の使節団を当時のヨーロッパ人が理解しやすいものに置き換えて表現したことを明らかにされた点は良かったと思います。今後の課題としては、絵画以外の文献資料等も取り入れ「なぜそのように表現される必要があったのか」といった点や、当時の日本やヨーロッパにおける政治的・文化的・宗教的な時代背景について丹念に描き出していく必要があると思います。また、当時のキリスト教団をめぐる動向にも注目し、そのうえで日本の使節団が持つ宗教的な意味合いや、各使節団の共通点や相違点についても比較分析されるといいのではないでしょう

か。

続いて、宋多情さんの発表に関しては、これまでの奄美大島を中心としたものからあらたに他の島々を研究対象にした点や、担い手であるガイドを経営学的な視点から類型化しその発展過程を分析した点などは評価できると思います。このように新しい研究対象や研究手法に取り組めるのもプロジェクト研究ならではの点だと思いますので、皆さんも積極的にいろいろな課題に挑戦していただきたいと思います。今後は現地での聞き取り調査などを行い、島をめぐる社会状況やそこに暮らす人びとのライフスタイルの変遷といった様々な視点から分析を加えることで、より現実的な類型化も可能になるのではないのでしょうか。また、島嶼のエコツーリズムを題材にするにあたっては、「なぜ島嶼なのか」、「なぜその島なのか」といった点を明らかにする必要があると思います。歴史的文化的背景を含めた「自然環境と人々との関係性」について比較分析し、島ごとの特性や相違点などについても言及されるといいのではないのでしょうか。

最後に、他の発表にも言えることですが、「各研究テーマ」と「総合テーマ」とのすり合わせが十分でなかったことが少し残念に思いました。しかし、どの発表も研究素材としては非常に興味深いもので、今後の研究成果に期待しています。

たからべ
財部 めぐみ

鹿児島大学非常勤講師。鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻（文化政策コース）修了。

「プロジェクト研究報告会の感想と講評」

星野 元興
(ゲストコメンテーター)

人文社会科学研究科（博士後期課程）の1年次後期には、「プロジェクト研究」が必修とされている。自らの研究を進める一方で、共同テーマについて研究を深めることが望まれるのである。今年度は、「差異から『世界』を見る」というテーマのもと4名の学生による報告であった。世界的に、己の主張を通すことが正義となりつつある現代社会において、今一度様々な「差異」を考え直すよい機会になったのではないだろうか。半期間という短い期間での調査・研究であり、それぞれに苦労されたことであろう。短時間での報告ではあったが、学生たちそれぞれの思いが伝わる報告会になったのではないだろうか。その中で、濱田みゆきさん、寿洋一郎さん2名への講評を述べさせて頂く。

濱田さんの報告は、学生へのアンケート調査によって得られたデータをもとに、活字（原作）と映画への行動・意識を分析し考察するという研究であった。その中で「映画を観た人も原作を読んだ人も互いに興味を喚起しあう」という結論を導きだせたことは今後の研究に期待を抱かせてくれるものである。

一方で、濱田さんのイメージする映画や原作像が報告の中でもう少し明確化されれば親切であったと思う。そのことはアンケート内容にもいえ、濱田さんがイメージする映画や原作について、必ずしも学生が答えたものではない。研究にさらなる正確性を求めるならば、映画、原作をある程度絞る、もしくは一つの作品に限定した方が、主張すべき結論に説得力が生まれるのではないだろうか。

しかし、本研究は今後、社会学、人類学、そして経済学など様々な社会科学の分野から注目される研究となるものである。

寿さんの報告は、奄美群島区で1980年代初頭から1990年代にかけて繰り返された「保徳戦争」と呼ばれる選挙活動について、歴史、地理、経済、中央政治との関わりからの研究であった。

研究成果として、島特有の交通事情が候補者の当落に大きな影響を与えたとの報告であった。確かに、東京から船で36時間かかる状況では、思うような地元での政治活動が行えない状況は容易に想像できる。

だが、発表の中で、寿さんの問題意識、指摘を裏付ける資料や事例の提示があれば、より親切であったと思う。しかし、これまでの奄美群島内での選挙活動に注目した先行研究から、島内外の社会環境を含めた視点での研究へと発展していくテーマであると期待する。

ここでは2名の学生への講評を記したが、他の学生にも同じような感想を持つ。研究とは時に主観的になりがちである。常に論拠を確認しながら今後の研究に取り組まれることを期待する。

博士後期課程での学生生活は始まったばかりです。今後の研究に期待します。頑張ってください。

ほしの もとおき
星野 元興

浄土真宗本願寺派 大嵯寺 住職。鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻（文化政策コース）修了。

プロジェクト研究を振り返って



濱田みゆき

今回のプロジェクト研究の共通テーマは“差異から「世界」を見る”でした。私たち4人は、それぞれ各自の持つ違う課題から、そのテーマに取り組みました。私は発表の最後で“差異からみえる「物語世界」は深さや違い、広がりのある、豊かな世界”と締めくくりました。これはこのプロジェクト研究の結論ではなく、今回の結果を踏まえた今後の課題に近いものです。

私の個人的な見解ですが、この“差異のある世界は豊かである”ということは、他の人たちの発表を聞いても思うことでした。「豊か」という言葉には語弊があるかもしれませんが、差異は決して悪いことではなく、大事なことであり必要なことであると、このプロジェクトを通して考えました。差異という言葉は、同一という言葉と最もかけ離れているようで、実は隣り合わせなのかもしれない、とも思いました。

選挙の内側（実態）と外側（外的環境）との差異、また選挙の当事者である奄美の人たちと奄美以外の人たちの視点、意識の差異は複雑ではあるけれども、一方的には語れない深いものがあるのだと感じました。島嶼のエコツーリズムにしても、設

立過程の違いやその理由、自然環境や地域文化の差異やさらにそこから生じる差異からは、広がりのある多様な世界が見えてくるようです。日本とヨーロッパという差異のある文化の遭遇で何が発生したのでしょうか。

私たち4人はもちろんその入り口に立ったばかりで、これからこのプロジェクト研究をきっかけとして、どう進むのかはわかりませんが、今後の進捗状況を互いに知る機会があることを楽しみに、自分の研究を進めていこうと思います。

末筆ながら、アンケートにご協力いただいた学生の皆様、ご指導、ご助力いただいた皆様に感謝して筆を擱きます。



私は、歴史を学ぶ学生として、長い時間をかけてスペインと日本の最初の文化的な関係について研究した。この研究を行う機会は、私たちがプロジェクト研究の共通テーマのキーワードを「差異」と決めた時点で私に訪れた。

スペインとヨーロッパで見られる天正と慶長の遣欧使節団の影響と表象のあり方は「差異」の縮図だ。日本の文化はスペインとはかなり異なっているため、それを理解するために、日本人の行動と服装をヨーロッパの想像力に適合させて表現したことが、彼らの記述や絵画から読み取れた。さらに、報告で見てきたように、当時のヨーロッパで両使節の影響は顕著であった。私のプロジェクト研究のテーマは、ヨーロッパ人は自分の領土でどのように日本の文化を理解し、日本人と対話することができたかを示すことであったが、全体的にはその目的を達成できたと思う。ただ、時間と空間的な制約のため、より具体的な分析はできなかった。それを今度の課題にしようと思う。

最初、私は「プロジェクト研究」の目的を全く理解できなかったが、最終的には本年度のプロジェクト研究に参加したことはとても素晴らしい経験であった。授業中、そしてそれ以外の多くの時間に、私が原稿を書くために必要不可欠なアドバイスや励ましをもらった。さらに、原稿を書いたおかげで学術的な日本語用法の多くの側面を学んだ。それは私の博士論文を書くための訓練となった。報告会についても、私は初めて日本語で発表をしたので、将来の学会やプレゼンテーションのためにとても良い経験となった。

一方、私はこのイベントで、専門の異なる院生が共通のテーマで参加することは、異なる分野間の連携を奨励するためには、とてもいいアイデアだと思う。それは学術の研究の世界ではとても必要なものである。

終わりに、プロジェクト研究に関わったすべての人々に感謝を伝えたい。特に丹羽先生の指導と

助言がなければ、私はプロジェクト研究の原稿と報告が全くできなかったと思う。したがって、みんなに感謝したいと思う。



宋 多情

あっという間に報告会が終わった。去年の10月から約4か月間、プロジェクト研究という名で国籍も年齢もバラバラの4人が集まり、「差異から世界を見る」という共通テーマを持って頑張ってきた。振り返ってみると、テーマを決める時から大変だった記憶がある。私自身は、プロジェクト研究を新たなステップとして、今までの研究で扱ってないところをあえてやってみようといういろいろ悩んでいた。個人のテーマさえきちんと決めていないのに共通テーマを決めようということがなかなか難しく感じられた。先輩から今やっている研究を続ける方が時間的に間に合うとアドバイスをもらっていたが、頑張ればできるかも知れないと思ってしまい後でけっこうな苦勞をした。とくに後半になってからほぼやり直しの感じで内容を変えたことのダメージは相当大きかった。このような状況であったので、自分のことで精一杯になり、みんなの研究に対するコメントがあまりできなかった気がする。なんのための共通テーマだったのかなという疑問も若干残る。

あまりにも研究が進まず、毎週の報告を嫌がっ

ていた私であったが、できたものだけでもきちんと報告しなさいという桑原先生の教えから、なんとなく前に進めるようになった気がする。ありがとうございました。いつも優しくアドバイスをしてくださった丹羽先生、私が気付いてないミスをさらっとチェックしてくださった市川先生、担当でないにも関わらずエコツーリズムについていろいろ教えてくださった萩野先生、コメンテーターの財部さんにも感謝いたします。授業でいろんな質問とアドバイスをしてくれた先輩、研究生の皆様、また、いつも相談に乗ってくださった特任助教の福ヶ迫さん、教務補佐の遠矢さんにも大変お世話になりました。ありがとうございました。

何よりも嬉しかったのは、自分の研究フィールドである奄美で報告会に参加し、今までお世話になった方々の前で発表ができたことである。しかし、奄美のことをあまり話すことができなかったのも、改めて申し訳ない気持ちをお伝えしたい。今後、いろんな報告の場をとらえて、きちんと奄美のことを語りたいと思う。最後に奄美の方でいろいろ面倒を見てくださった皆様に心から感謝申し上げます。



大学院でのゼミの難しさか。先生が一通り説明した後、理解度を一人ひとりに念押しする必要性があっても「院生だから当然判っているだろう」と見なされがちであるが、私の場合はそのようには運ばなかった。プロジェクト研究が何たるかの内容把握に至らず、生煮えのままその場その場を繕ってきた。最後の報告書作成の作業労苦も甘く見過ぎ、締め切りには毎回遅れ、足手まといとなってしまった。特認助教の福ヶ迫さんと教務補佐の遠矢さんがいなければ発表には至らなかった。冒頭、お二人にお詫びと限りない感謝の誠を捧げておきたい。

研究とか執筆にも疎かった私は、先生方の大所高所からの適確なご助言のおかげで36年に及ぶ奄美群島特別区の選挙史を5期に区分を試みた。下記の如く区分毎にその時代の特徴、特筆事項、他の時代との「差異」を見つけ出し、調べ記述してきた。さもないと、史実の羅列だけに終わり、さなきだに単調で面白みもない内容がもっとつまらなくなりそうであった。凡庸なことかも知れないが、私の場合はこの作業で新たな発見があり開眼させられた思いである。

1. 復帰直後の独自選挙

復帰運動の最大の功労者泉芳朗の落選と中央直結を選択した郡島民

2. 保岡・伊東交互当選期

高度経済成長下で取り残された奄美群島の交通事情の劣悪さが選挙に影響

3. 転換期

中央の派閥論理による公認と群島内の地域・島間問題、世代交代

4. 保岡興治一強時代

交通環境の改善で現職不利は解消、田中全盛時代に連動した保岡の政治力拡大、一方、独走態勢がシラケ選挙を招き不満が顕在化

5. 保徳戦争の時代

以上の歴史的経過を踏まえて保徳戦争に突入、反角×擁角の戦いでもあり全国的にも注目された。3回の選挙の経過、結果等の説明は今後の私の研究課題

最後に、「差異」という共通テーマにしたがって、私は保徳戦争までの衆議院議員奄美群島区選挙を内と外に分け、外を中心に観察してきた。保徳戦争は余りに負のイメージが強過ぎ、研究対象にならないと思しき政治現象が、「否、違う。それなりの意味を有し、かつ歴史的必然性を帯びている側面もあるのだ」と、今回のカリキュラムを通じて感得するに至った。



「プロジェクト研究」は、地域政策科学専攻の必修科目である。この授業を通して、学生は自己のテーマや調査研究方法を模索し、中間発表を重ねて教員や他の学生からの意見や助言を聞き発表内容を固めながら、他分野の発表を聞き意見を陳述することで、研究者としての力を総合的に高める。

平成27年度「プロジェクト研究報告会」概要

総合テーマ：差異から「世界」を見る

開催日時：2016年2月13日（土） 14：00～17：30

会場：郡元会場、奄美会場（テレビ会議システムで中継）

郡元会場：総合教育研究棟（文系） 3階LL教室

奄美会場：奄美サテライト教室

◇研究報告

濱田みゆき（文化政策コース1年）、ホルヘ・ガルシア・アロヨ（文化政策コース1年）、
宋 多情（島嶼政策コース1年）、寿 洋一郎（地域政策コース2年）

◇ゲストコメンテーター

郡元会場：星野元興（浄土真宗本願寺派 大嶺寺住職）

奄美会場：財部めぐみ（鹿児島大学非常勤講師）

◇司会

丹羽謙治（人文社会科学研究科教授）

平成27年度「プロジェクト研究」参加一覧

履修院生：

地域政策コース 馬場 武（2年）、寿 洋一郎（2年）

文化政策コース ニコライ・ギュレメトヴ（2年）、橋口正樹（2年）、松崎大嗣（2年）
ホルヘ・ガルシア・アロヨ（1年）、濱田みゆき（1年）
李 竺楠（1年・10月入学）

島嶼政策コース 張 秋菊（2年）、中村敬子（2年）、宋 多情（1年）

担当教員：桑原季雄（島嶼政策コース・人文社会科学研究科教授）

丹羽謙治（文化政策コース・人文社会科学研究科教授）

市川英孝（地域政策コース・人文社会科学研究科准教授）

指導補助：福ヶ迫加那（人文社会科学研究科特任助教）

プロジェクト研究報告集 第13号

印刷 2016年 3 月25日

発行 2016年 3 月31日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

(博士後期課程) 地域政策科学専攻

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番30号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=13129

印刷・製本 濱島印刷株式会社

©2016無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648

